

ようこそ野外民族博物館リトルワールドへ

活動趣旨

リトルワールドは、1983(昭和 58)年に開館した、世界中のさまざまな民族の文化や暮らしぶりを紹介する博物館です。人間は数百万年の進化の後、それぞれ与えられた環境の中で、生存と繁栄のために、生きるための技術、意思を交わすための言語、社会のしくみ、他の民族との関わり、自然観や世界観などに知恵を働かせてきました。文化とはどれもこうして培われてきた人間の知恵の結晶であり、これら文化をより身近なものとして体験・理解しようというのが当館の趣旨です。そのためにリトルワールドでは、学術的な調査研究をもとに、世界各地の家屋、生活用具などの収集、保存、解説、展示をしています。

現在地球上に暮らす私たち人間一人類、ヒトは、ひとつの種、同じ生き物一動物一ですが、ずいぶん違うところもあります。人間一般がもつ共通性と民族や地域ごとにある多様性は、人間の特徴のひとつです。

リトルワールドでは、本館展示室と野外展示場という2つの展示を通して、「人間とは何か？」ということについて、みなさんに考えていただきたいと思います。

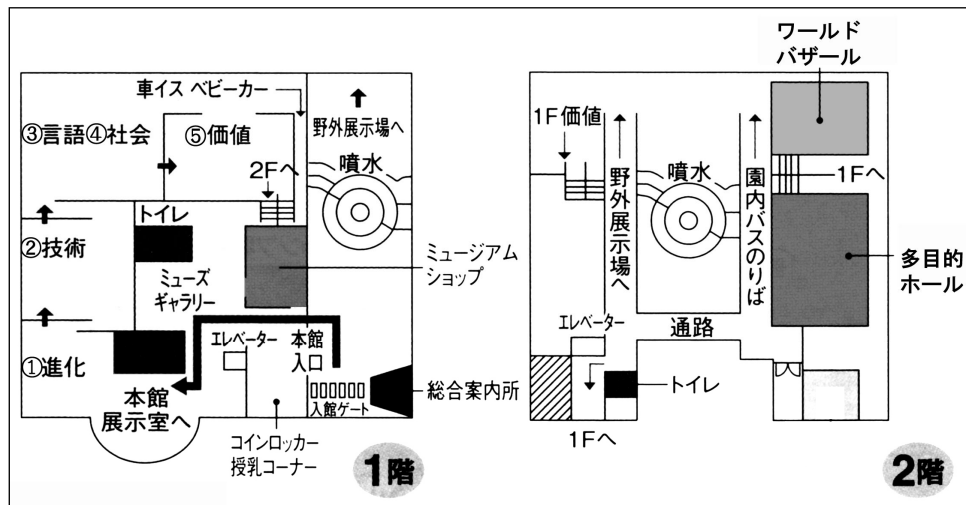


本館展示室

世界各地から収集した民族資料約 6000 点を、テーマごとに 5つの部屋で展示しています。

地域や民族を超えて、同じ目的のために考え、作り、使う
道具・モノを見くらべて、人間の 共通性・普遍性、あるいは、
民族の独自性・多様性を探ってください。

本館展示場平面図



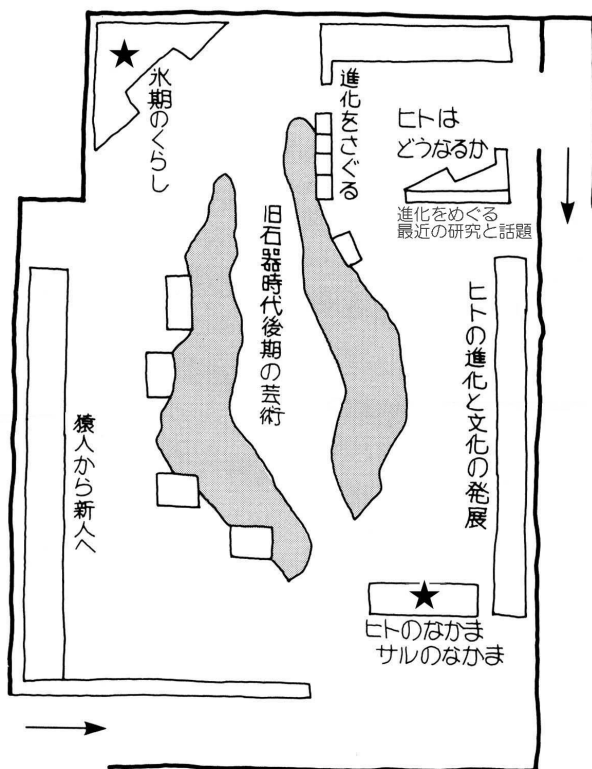
野外展示場

23 カ国 31 の家屋で、各地の特色ある文化を紹介しています。
家をまるごと移築、復元、展示するのは、住まいにはそれぞれの
民族の知恵や知識や技術が 集積 しているからです。展示する家や
生活用品から、そこに住む人びとの暮らしぶりを想像して下さい。

なお、国際情勢の変化や 学術研究 の発展にともない、展示の一部に
現状にそぐわない箇所が生じておりますが、状況 や学説の安定を
まって改訂する予定です。どうぞご了承 のほど、お願いいたします。

ほんかんだい しつ しんか
 本館第1室：ヒトのはじまり——進化

ヒトが現在のような身体^{からだ}になり、現在のような文化^{はってん}を発展させる
 までには600万年とも700万年ともいわれる長い年月がかかって
 います。この展示室では、人類^{じんるい}のなりたちとその生物^{せいぶつ}的、文化^{ぶんか}的 特徴^{とくちょう}、
 そして全世界^{ひろ}への拡がり^{しょうかい}を 紹介^{しょうかい}します。



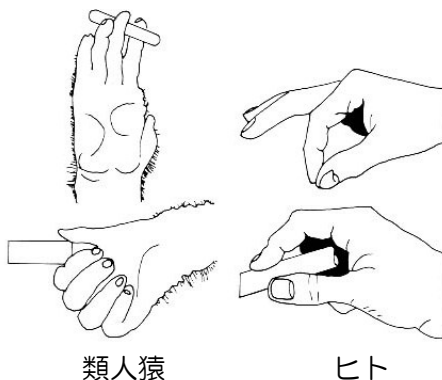
EVOLUTIONS

Through biological specimens and prehistoric artifacts, this hall examines the process of human evolution and the diffusion of human beings to all over the world.

ヒトの器用な手^{きよう}

ヒトは直立二足歩行をすることにより、両手が自由になりました。それだけでなく、ヒトの手は^{のう}脳の^{はったつ}発達と互いに作用しあって、たいへん器用な指さばきができるようになりました。

ヒトの手は、親指が長く、他の4本の指と十分に^{たいこう}対向しているの^で物を上手に「にぎる」、「つかむ」、「つまむ」ことができます。いっぽう、^{るいじんえん}類人猿は親指がみじかいので、ひとさし指と中指とで、あるいは折り曲げたひとさし指と親指とで物をつかみます。



マンモスの骨で建てた家

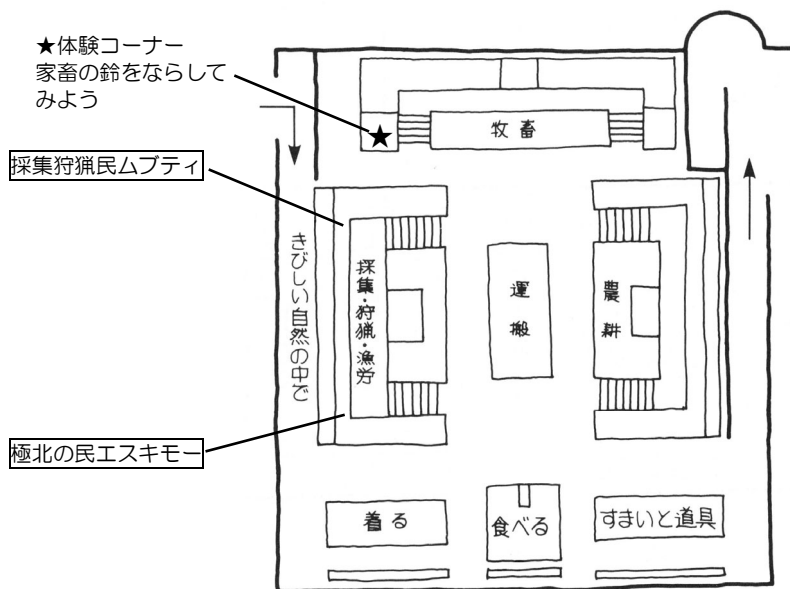


シベリアでは、マンモスの骨や^{きば}牙で建てた数^{あと}万年前の住居跡が発見されています。直径^{ちようけい}約5mのドーム^{がた}型で、骨組みを丸太とマンモスの牙でつくり、その上に皮をかぶせた住居です。毛皮を^お押さえるためにはマンモスの牙や骨が利用され、ドームの^{せっち}接地部分のまわりには、マンモスの頭部やアゴの骨がならべられていました。ジオラマでその様子を再現しています。

身の回りのものを活用し、^{きのう}機能的な住居や衣服を発明して寒さを^{こくふく}克服した人々は、やがてアラスカへわたりアメリカ大陸を南下していきます。このようにヒトは、生物学的な変化ではなく、文化によって^{かんきよう}新しい環境に^{てきおう}適応していった結果、世界中へ広がっていきました。

本館第2室：生きるための工夫——技術

器用な手と、それと共に発達した脳により、ヒトは多様な技術を編み出し、いろいろな道具を作ってきました。およそ1万年前まで、私たちの祖先は、野、山、川、海で生きる狩猟、採集、漁労の民でした。その後農耕や牧畜も生業としはじめましたが、多様な自然環境に適応して生活するために、食料の獲得とその調理、衣類、住まい、輸送などの技術を発展させてきたことは、人類共通に見られることです。この展示室では、人類のさまざまな技術を民族資料2000点余と映像プログラム40点余にて紹介しています。



TECHNOLOGY

Adapting to environments, human beings have developed various techniques: getting food, cooking, clothing, housing and transportation. This hall exhibits human achievements in technology.

映像プログラム一覧

カッコ内は撮影年です

- きびしい自然の中で生きる
 砂漠のサン（フッシュマン）：アフリカ南部、カラハリ砂漠（1962）
 極北のイヌイット（エスキモー）（1976）
- 着るための工夫
 1 身体の装飾と刺青 ブラジル（1975）とインドネシア（1982）
 2 ミン族のベニスケース パプアニューギニア（1968）
 3 木の皮でパンツを作る コンゴ民主共和国、ムブティ（1972）
 4 ハンモック ブラジル、カマユラ（1975）
 5 羊毛を手でつむぐ デンマーク、フェロー諸島（1979）
- 食べるための工夫
 1 クカクカの石蒸し料理 パプアニューギニア（1968）
 2 サゴ澱粉精製インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット（1982）
 3 ユカの毒抜き コロンビア、アマゾン河支流（1972）
 4 テフの草でパンを作る エチオピア、アムハラ（1980）
 5 塩づくり インドネシア、イリアンジャヤ、ダニ（1968）
 6 ソバのごはん 中国、雲南省、アシ（1981）
- すまいと道具
 1 ミン族の石斧づくり パプアニューギニア（1977）
 2 かごづくり ブラジル、ナンビクワラ（1978）
 3 竹のびく作り 中国、雲南省、タイ（1981）
 4 ナイル川の土器づくり 南スーダン、ヌエルとヌバ（1979）
 5 樹上の家作り フィリピン、バラワン（1974）
- 採集・狩猟・漁労：オセアニア
 1 海と川から食料をとる オセアニア各地（1969,77,82）
 2 素もぐり・真珠母貝とり ツアモツ諸島（1969）
 3 風あげ漁 ソロモン、マライタ島（1971）
 4 ジュゴン漁と海亀漁 パプアニューギニア（1977）
 5 サメの輪どり サモア（1969）
- 採集・狩猟・漁労：アフリカ
 1 森の中で採集する コンゴ民主共和国、ムブティ（1972）
 2 網の追込み猟 コンゴ民主共和国、ムブティ（1972）
 3 ナイル川のカバ狩り 南スーダン、ヌエル（1979）
 4 イツリの森で象を狩る コンゴ民主共和国、ムブティ（1972）
- 農耕：イモと畑作
 1 マンジョウカの収穫 ブラジル、カマユラ（1975）
 2 マブリックのヤムイモまつり パプアニューギニア（1977）
 3 タロイモの料理 ソロモン、サンクリストバル島（1974）
 4 ムスタンのソバづくり ネパール、チベット（1977）
- 農耕：焼畑と水稻耕作
 1 焼畑の陸稲栽培 タイ北部、アカ（1974）
 2 ダニの焼畑 インドネシア、イリアンジャヤ（1970）
 3 水田の稲作 中国、雲南省、白族（1981）
 4 水稻の収穫 インドネシア、バリ島（1967）
- 牧畜：ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ
 1 サーミ人のトナカイ放牧 ノルウェーとフィンランド（1980）
 2 アルプスの冬の牛追い スイス（1971）
 3 ナイル川で牛の放牧 南スーダン、ヌエル（1979）
 4 ラクダの血と乳を飲む ケニア、トゥルカナ（1980）
 5 ケチュアとコンドル バル、アンデス山地（1972）
- 牧畜：西アジア・中央アジア・北アフリカ
 1 高原の遊牧民バクティアリ イラン（1972）
 2 ヤギや羊を放牧する エジプト、ベトウィン（1982）
 3 チベットのヤク遊牧 中国、チベット自治区（1982）
 4 ヤギの放牧 中国、雲南省、アシ（1981）
 5 トルクメン族のケチャー作り イラン、ゴルガン高原（1982）

※映像装置により自動再生しているものがあります。ご了承下さい。

きょくほく たみ 極北の民エスキモー

エスキモーは、北極圏に沿った7000キロ以上の広大な地域にちらばって暮らす複数の民族の総称です。

彼らは、グリーンランド(デンマーク領)、ロシア、アメリカ、カナダのそれぞれ一部、計4つの国にまたがって暮らしています。その中のカナダ・エスキモーの人びとを「イヌイット」と呼ぶこともあります。



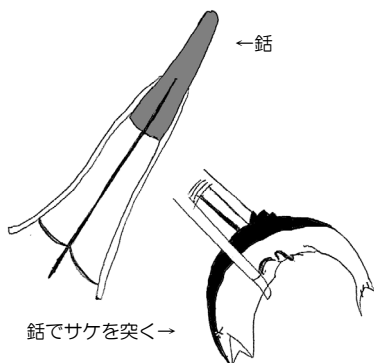
*エスキモーの居住地域

エスキモーの伝統的な食生活は狩猟によって得た生肉が中心です。アザラシやセイウチ、クジラ、カリブー(トナカイ)などの大型海獣・動物、サケやマスなどの魚を捕獲していました。寒冷な気候のために植物採集によって栄養を得ることは困難ですが、その代わりに生肉を食べることで、ビタミンCやビタミンDといった栄養を摂りました。もし、エスキモーの人びとが肉を煮たり焼いたりして食べ続けたら…必要な栄養が摂れず、病気になってしまうかもしれません。

くふう 工夫された漁法

エスキモーの人びとは海の生き物を捕えるために様々な工夫をしてきました。例えば、大型のセイウチやクジラなどは、鉆につなげたロープに抵抗となる浮き袋をつけることでスピードと体力を奪い、つかまえやすくします。

サケやマスはおとりと鉆を用いて捕らえます。おとりはセイウチの牙や骨でてきており、小魚の形をしています。おとりを水中で泳がせることでサケをおびき寄せ、狙いを定めて鉆でしとめます。サケを突く鉆は、独特な三つ又の形をしています。中央の鋭い針がサケの胴体を刺し、その左右につけられた針がサケの胴体をがっちりとかまえて離さない仕組みです。



鉆でサケを突く→

★ここで紹介した道具は、狩猟採集コーナーに展示してあります。どんな道具が実際に見てみましょう。

さいしゅうしゅりょうみん

採集狩猟民ムブティ



ムブティは、アフリカ中央の森林地帯、コンゴ盆地^{ほんち}北東部のイトウリの森に約3～4万人住んでいます。

背が低く、男性は平均^{へいきん}145 cm前後、女性は135 cm前後であるため、ピグミー（小さい人）とも呼ばれてきました。家族5～20からなる、バンド^よという^{きょじゅうしゅうだん}居住集団をつくり、森の中で^{いどうせいかつ}移動生活を送っています。

森棲みの民

ムブティは、野生のイモ類^{やせい}、キノコ、木の実などを採集^{さいしゅう}し、弓矢^{ゆみ}や網^{あみ}を用いてダイカー、サルなどの小型動物を狩猟^{しゅりょう}します。網を用いた狩猟をネット・ハンティングといい、蔓^{つる}の内皮^{ないひ}を編^あんで作った高さ1～1.5m、長さ40～100mのネットをつなぎ合わせて円形に張りめぐらし、動物を追いたててネットに絡^はませてつかまえます。ゾウなどの大型獣^{おおがたじゅう}を槍^{やり}でしとめることもあります。蜂蜜^{はちみつ}も重要な食糧^{しょくりょう}で、ハニー・シーズン（蜂蜜の季節）と呼ばれる4～6月には、食物の70%が蜂蜜でまかなわれます。

森の外との関係

イトウリの森の近くにはムブティだけでなく、農業^{のうぎょう}を営^{いとな}む人びとも住んでいます。ムブティは彼らと共生的^{きょうせいてき}関係を形成し、8月から11月の雨季の間、ムブティは森を出て農耕民の畑仕事を手伝って生計をたてています。狩猟で得た肉や蜂蜜を農作物と交換したりもします。ムブティは、かつては独自の言語を持っていましたが、現在はその言語をなくしてしまい、近くに住む農耕民の言語を借用して使っています。またムブティは、歌やダンスが上手なことで有名です。

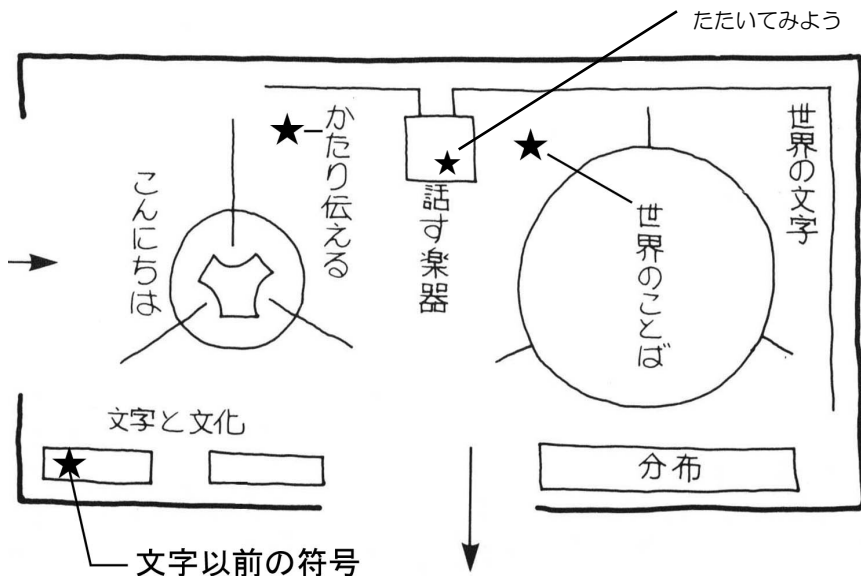
イトウリを含めたアフリカの森林は、1990年代から外国企業による開発が進み面積が大きく減少^{げんしょう}しました。森の近くを伐採^{ばっさい}会社のトラックが走るようになり、モノや人がひんぱんに出入りするようになりました。過度^{かど}な伐採の影響^{えいきょう}で環境破壊^{かんきょうはかい}が進んだ土地もあります。森の民のくらしは、森の外—私たちを含めたグローバルな関係の中で変わりつつあります。

ほんかんたい しつ げんご 本館第3室：ことばの世界——言語

“ことば”はヒトを他の生き物から区別する特徴のひとつです。
 人類は、数万年前から言語を使用していたと考えられています。
 お互いの意志を伝え合うために、音や声を発し、記号を用い、
 そしておよそ 5,000 年以上も前に文字を発明しました。言葉の
 使用は、抽象的 思考を可能にし、また知識を次の世代に伝達し
 集積させていくのに重要でした。

この展示室では、言語の役割とその多様性を、民族資料と
 ともに音声や映像で紹介しています。

★体験コーナー
 ファン人の太鼓を
 たたいてみよう



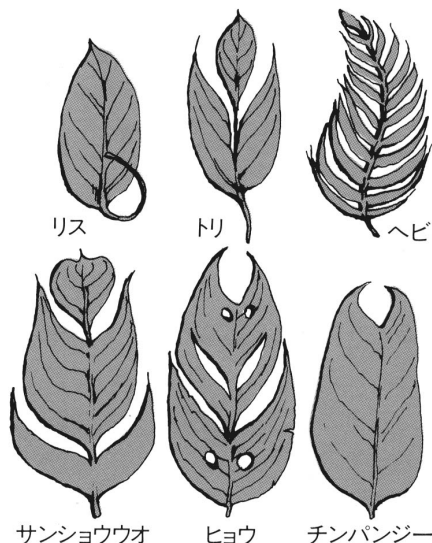
LANGUAGE

To communicate with each other, human beings use languages
 consisting of sounds, writings and symbols. This hall explains
 the role and diversity of languages.

文字以前の符号—エコンビ^{ふごう}

コンゴ民主共和国（旧 ザイール）
のイトウリの森で 採集^{さいしゅう} 狩猟^{しゆりよう} 生活を
する民族ムブティが、カサブルとい
う植物の大きな葉でつくるエコンビ
と呼ばれる目印は、動物の種類や
自分の属する集団をあらわします。

獲物^{えもの}を追うとき、根元^{ねもと}を進行方向
に向けて置いてゆくことによって、
道に迷わず、仲間に行き先を伝える
ことができます。



話す楽器：太鼓ことば^{たいこ}

西アフリカから中部アフリカにかけての地域では、人間が話す言葉の
特徴^{とくちょう}をなぞって、太鼓の音の高低^{こうてい}、強弱^{きやうじゃく}、長短^{ちやうたん}によりメッセージを伝える
習慣^{しゅうかん}があります。写真はカメルーンのファンの太鼓です。

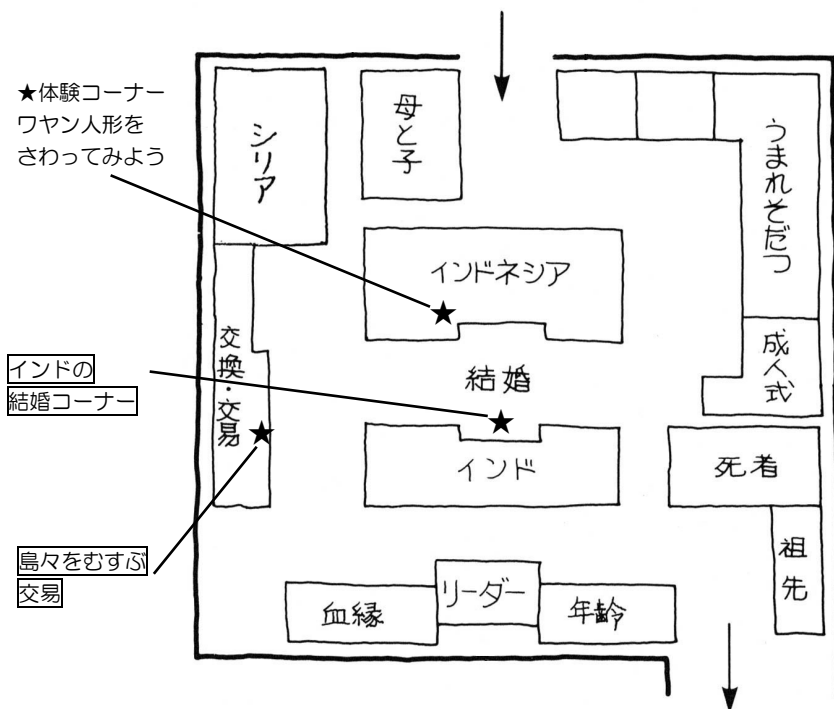
マホガニー製のこの太鼓の音は数 km 先まで届き、森に働きに出かけて
いる仲間を呼び戻したり、他の村へ何かを伝えたいときに用います。

熱帯雨林の森では狼煙^{のろし}を
あげても煙は葉に遮^{さえぎ}られて
しまいます。一方、太鼓の音
は人間の声よりも遠くまで
響くため、電話や無線^{むせん}の
ない時代、とても優れた
通信手段^{すく}でした。現在でも
祭りや儀礼の場を中心に
使用されています。



ほんかんたい しつ しゃかい
 本館第4室：人のつながり——社会

ヒトは、家族をはじめ、いろいろな社会関係の網^{あみ}の目の中で生きています。ヒトの一生をたどりながら、さまざまな社会のしくみを説明し、社会を作^{そくめん}って生きる人類という側面を、1000 余の世界各地の民族資料と 40 数プログラムの映像から紹介します。



SOCIETY

From birth to death, man's life is a serial reproduction of human relations. This hall presents various kinds of social systems such as family, kinship, trade and community.

うまれ育つ：出産から少年まで

- | | | |
|---|-----------|-----------------------------|
| 1 | クカクカの山の出産 | パプアニューギニア (1968) |
| 2 | 頭と顔の整形 | ベネズエラ、ヤノマモ (1974) |
| 3 | 子供の命名式 | インドネシア (1970) とエチオピア (1980) |
| 4 | 森の狩人としつけ | コンゴ民主共和国、ムブティ (1972) |
| 5 | チベットの出家 | ネパール、ムスタン (1977) |
| 6 | 正月とこども | 中国、雲南省、タイ (1981) とアシ (1981) |

うまれ育つ：成人式

- | | | |
|---|------------|----------------------------|
| 1 | カツオ漁成人式 | ソロモン諸島 (1975) |
| 2 | ワニの成人式 | パプアニューギニア、セビック川流域 (1975) |
| 3 | ムブティの成人式 | コンゴ民主共和国、イトゥリの森 (1982) |
| 4 | 割礼と抜歯 | エチオピア (1972) と南スーダン (1979) |
| 5 | ミツオゴの成人式 | カボン (1973) |
| 6 | 囲いの中で美女にする | ブラジル、カマウラ (1981) |

家庭をつくる：交際と求婚

- | | | |
|---|------------|----------------------------|
| 1 | メンティの男女交際 | パプアニューギニア (1981) |
| 2 | 求愛の笛吹き | バングラデシュ、ムル (1973) |
| 3 | 求愛のダンス | パプアニューギニア、トロブリアンド諸島 (1976) |
| 4 | 雲南の歌垣アシ跳月 | 中国、雲南省、アシ (1981) |
| 5 | チロルの冬追いまつり | オーストリア (1971) |

家庭をつくる：結婚式

- | | | |
|---|----------------|-------------------------|
| 1 | 貝貨で嫁もらい | ソロモン諸島、マライタ島 (1973) |
| 2 | アムハラの幼児婚 | エチオピア (1980) |
| 3 | ムブティの結婚式 | コンゴ民主共和国、イトゥリの森 (1982) |
| 4 | ロマ (ジプシー) の結婚式 | マケドニア (旧ユーゴスラビア) (1975) |
| 5 | クレタ島の結婚式 | ギリシャ (1972) |
| 6 | バラの谷の結婚式 | ブルガリア (1976) |

社会のしくみ：戦争と平和

- | | | |
|---|-------------|-----------------------------|
| 1 | ゴゴダラのカヌーレース | パプアニューギニア (1977) |
| 2 | 養子縁組 | インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット (1982) |
| 3 | 藩王の裁き | イエメン (1977) |
| 4 | ヨボのまつり | ベネズエラ、ヤノマモ (1975) |
| 5 | 部族対抗大相撲 | ブラジル、アマゾン河支流 (1974) |

社会のしくみ：呪術師とシャーマン

- | | | |
|---|-----------|--------------------------|
| 1 | 呪術で病気をなおす | コロンビア、アマゾン河支流 (1972) |
| 2 | 魔の呪術ブードゥ | ハイチ (1982) |
| 3 | 殺人の呪術 | パプアニューギニア、イエローリバー (1977) |
| 4 | 収穫感謝祭 | インドネシア、ダヤック (1972) |
| 5 | 災厄ばらいの家祭 | 韓国、京畿道 (1972) |
| 6 | 死者がのり移る巫女 | インドネシア、バリ島 (1973) |

葬礼

- | | | |
|---|------------|---------------------|
| 1 | クカクカのミイラ作り | パプアニューギニア (1968) |
| 2 | ムスタンの鳥葬 | ネパール、チベット (1977) |
| 3 | 鳥の羽根で死者を飾る | ブラジル、チュカハマイ (1981) |
| 4 | 石積みのお墓 | マダガスカル、マハファリ (1975) |
| 5 | ラマ教の火葬 | インド、ラダク地方 (1982) |

祖先とのつながり

- | | | |
|---|-----------|-----------------------------|
| 1 | 祖先供養マネネ | インドネシア、スラウェシ、トラジャ (1972) |
| 2 | 二次葬クワンカイ | インドネシア、ダヤック (1972) |
| 3 | 祖先の頭蓋骨と踊る | パプアニューギニア (1977) |
| 4 | ドックドック | パプアニューギニア、トーライ (1975) |
| 5 | ビスのまつり | インドネシア、イリアンジャヤ、アスマット (1982) |

インドの結婚コーナー：カースト

カーストとは、結婚や食事に関する「タブー（きんき禁忌）」など、げんかく厳格なきせい規制をもつ、インドのかいそうせい階層制のつうしょう通称です。カーストによる差別は法律で禁止されていますが、とくに地方では今でも社会に根づいています。

ヴァルナ カーストというと、インド古来のバラモン（しさい司祭）、クシャトリア（おうこう王侯・ぶし武士）、ヴァイシャ（しょみん庶民）、シュードラ（れいぞくみん隷属民）の四姓と理解されることが多いですが、これは正確には「ヴァルナ（色）」と呼べられます。古代にヨーロッパ系のアーリヤ人がインドに侵入して、支配者となりました。肌の白いアーリヤ人と肌の色が濃い先住民とを区別するヴァルナ（色）という語が使われ、みぶん「身分」「かいそう階層」の意味が加わりました。こんけつ混血が進み肌の色では区別できなくなったあとも、この語は依然として「階層」の意味に使われ続けたのです。

ジャーティ カーストとは、ポルトガル語で「いえがら家柄」「けつぞく血族」を意味するカスタに由来する語です。インドでは、カースト集団を「生まれ」を意味する「ジャーティ」という語で呼んでいます。ひとつの村は、ブラーマン（しさいヒンドゥー教司祭）、地主、農民、きんぎんざいくし金銀細工師、どうざいくし銅細工師、かじや鍛冶屋、どきしょくにん土器職人、おりものしょくにん織物職人などの しよくのうしゅうだん職能集団、すなわち数十の「ジャーティ」で構成され、それらは、じょう浄とふじょう不浄（かんねんケガレ）の観念に基づいて、上下のじょれつ序列がつけられています。

タブー そのために、カーストの上位の者が下位の者と食事を共にすることは、うづケガレが移ると考えられ、タブーとされています。また、カーストが異なる者同士の結婚もタブーとされ、「カースト内婚」（同じジャーティ内で結婚する）が行われます。ただし、婚姻が許される同程度のジャーティもあり、その場合、女性はより上位の男性に嫁ぐのがよいとされ、それを「じょうしゅうこんハイパーガミー（上昇婚）」と言います。その場合はとくに、たくさんの「じさんざいダウリー（持参財）」を嫁側が用意し、よめがわ婿側の家族にそうよ贈与することが求められます。

モノのやりとり ～島々をむすぶ交易

贈り物がつながる関係 人とお付き合いにとって、「贈り物」は重要な意味を持ちます。たとえば、誕生日や記念日にはプレゼントを贈るなど、私たちが誰かと親しい関係を続けたいと願うとき、想いや願いをこめて物や言葉を贈り合います。ポイントは、貰いっぱなしではなく「お返し」をすること。たとえ見返りを期待されていなくても、感謝の気持ちを表したり、別の機会に返礼をすることで、人間関係が円滑に進むというわけです。こうした「贈り贈られる」ことを「**互酬性**」といいます。個人的な関係だけでなく、会社・団体、集落や共同体といった集団同士においても、繋がりを深め強めるためのやり取りがされています。集団間になると、贈り物の行為はより形式的、儀礼的になる傾向があります。

島々をむすぶ交易 ニューギニアの島々では、島でとれる特産品を物々交換して生活に必要なものを手に入れます（交易）。島ごとに手に入る品が異なるため、近隣だけでなく広く遠洋に繰り出し離れた島々とも交易を行います。交換される物品は、魚、タロイモ、ココナッツなどの食品、土器、樹皮布や網袋などの生活必需品、装飾品、動物の牙、貝、島の羽にいたるまでさまざまです。交易品は、数々の島を経由しながらさらに遠く離れた島へと運ばれていきます。カヌーでの危険な航海を経てやって来た人々は大いに歓迎され、宴会に招かれ、もてなされます。

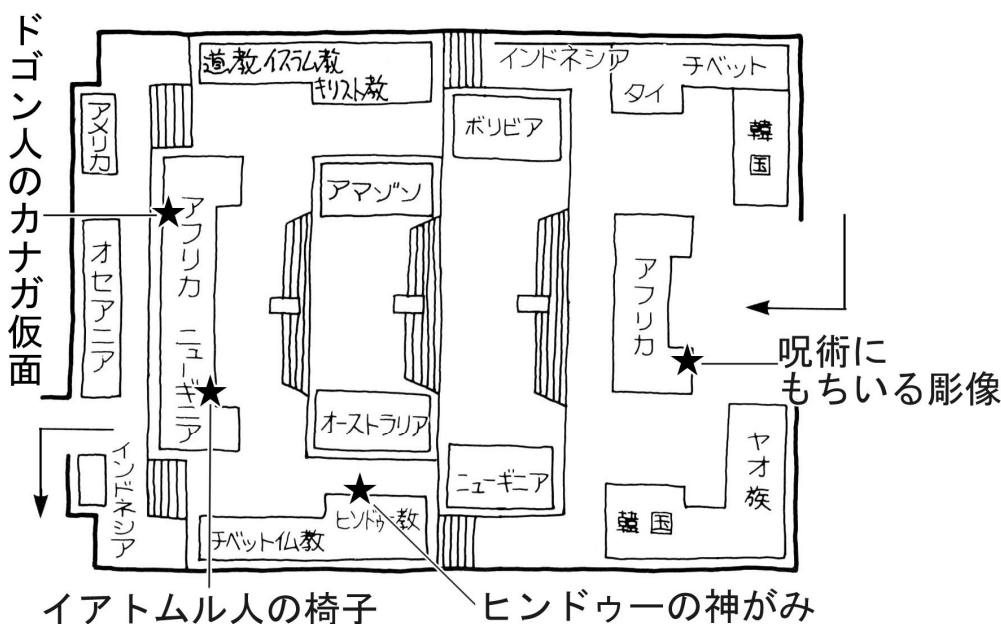
交易へは訪問先の儀礼や祭りに招かれたとき、新造カヌーのお披露目などの際に出かけます。交易は大体の品目の目安が決まっていますが、贈り物の形をとるので、親しい仲だとあげすぎたりもします。交換の成果は儀礼や祭宴の場で評価されますが、質や量もさることながら、誰から誰に贈られたかという系譜も重要です。

島で生きる人々にとって、他の島との関係を良好に保つことはくらしと直結する問題です。そのため交易は、単なる経済活動だけではなく、友好関係を深め人々の結びつきを強める役割を持っているのです。

ほんかんだい しつ うちゅう かち
 本館第5室：こころの宇宙——価値

ヒトは世界観^{せかいかん}をもち、そこに自分を位置づけることにより、ただ生きるのではなく、生きる意味や価値を見いだしました。これこそ他の生き物とは異なる、私たち人間の最大の特徴といえるでしょう。

この展示室では、人間が心の中に創^{つく}り出したイメージの表れとして、世界各地の宗教^{しゅうきょう}や儀礼^{ぎらい}や芸術^{げいじゆつ}を紹介しています。



VALUES

People have their own world view and add the color to the life. This hall presents religion, rituals and arts, as representation of the meaning of life.

じゅじゅつ ちょうぞう
呪術にもちいる彫像

これは、コンゴ民主共和国（旧ザイール）に住むコンゴ人たちの呪術医（じゅじゅつい）の彫像である。体中に鉄片（てつぺん）が埋め込まれているようすを見て、ワラ人形（ごすんくぎ）に五寸釘（ごすんくぎ）を打ちつける日本の呪術を思い出す方が多いと思う。ところがこれは、他人を突然（とつぜん）の不幸におとし入れるために使用する人形ではない。かえって、他人からの邪悪（じゃあく）な呪術から護（まも）ってくれる呪術医を表わしており、防（ぼう）御（ぎよ）のために使用するものなのである。

彫像の腹の部分には二つの突起（とつき）がある。ここには、呪術から守ってくれる呪薬（じゅやく）が納（おさ）められているのである。この突起には、鏡（はげん）の破片をつけたふたがされる。鏡は、悪霊（あくりょう）の目をくらませる、あるいは見えなくする働きがあるとされている。また、彫像の手には、小さな槍（やり）や刀（かたな）が持たされていて、これで悪霊と闘（たたか）うとされている。口は開かれ、体内にとりついた悪霊（は）を吐き出しているようすを示す。呪薬は腹だけでなく、頭に納められていることもある。

一般にアフリカの彫像では、男女の違（ちが）いが明確（めいかく）に外見で分かるように彫（ほ）ってあるが、この彫像では、男女の差はさっぱり分らない。ただ、呪術医、あるいは、悪霊から身を守るための彫像としての特徴があるだけである。同様な特徴をもった彫像は、人物像だけでなく、動物の像としても作られることがある。



ほんかんだい

しつ

うちゅう

か ち

本館第5室：こころの宇宙——価値

えんぜつしや いす

イアトムル人の演説者の椅子

パプアニューギニアのセピック川中流域に住むイアトムルの人々は、
 迫力に満ちた神像や仮面の作り手として知られています。彼らの村の中央に
 は精霊小屋が建ち、その内部には精霊や祖霊をかたどった彫刻や仮面などが
 置かれています。精霊小屋はイアトムルの人々を守護する精霊や祖霊が集う場
 所であるとされ、さまざまな儀礼が執り行われる神聖な場所です。



この「演説者の椅子」（イアトムル語で“テケ”）と
 呼ばれる椅子も精霊小屋の中に置かれます。椅子の
 側面には大きな顔をもつ立像がとりつけられていま
 すが、これはイアトムルの人々が生きる大地を生み出
 した創造主ワグンをかたどったものとされています。
 この椅子と立像は別々に作ってつけられたものでは
 なく、はじめから一本の太い丸太をくりぬいて作られ
 ています。

座ることのない椅子

この椅子は「けっして座ることのない」椅子です。
 精霊小屋に集う男たちは、腰かけたり寝そべったり
 するための台を使います。ふだん男たちは「演説者の
 椅子」に腰かけることはもちろん、触ったりすること
 も厳しく禁じられています。村の中での政治的な取り決めやもめごとの解決な
 ど、イアトムル社会にとって何か大切な問題が起きると、男たちは精霊小屋に
 集まって議論をします。演説をする男は、ある特別な葉（ユリ科植物）の束を
 手に持ってこれをときおり椅子にたたきつけながら、大きな声で自分の意見を
 まくしたてます。男たちは椅子に葉をたたきつけることによって、偉大なる
 創造主の力を自らのうちに呼び込み、その力を言葉に込めて発している
 のです。

ほんかんだい

しつ

うちゅう

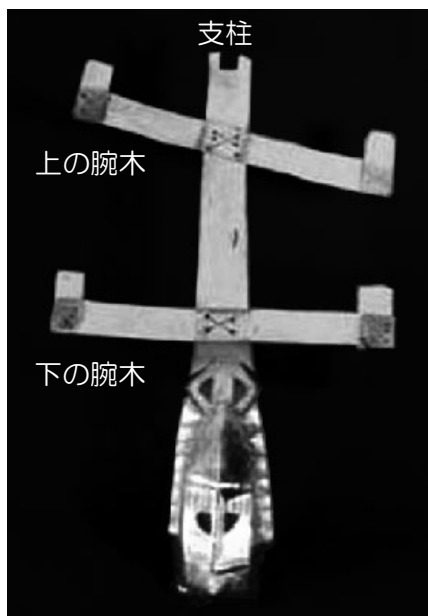
かち

本館第5室：こころの宇宙——価値

ドゴン人のカナガ仮面^{かめん}

これは、ドゴン人のカナガと呼ばれる仮面です。仮面の顔部分の上に、“キ”形^{かぎ}の飾りが乗るといふ独特の形をしています。飾りの中央^{ちゅうしゅう}の支柱^{しゆく}は世界の軸を、上の腕木^{うでぎ}は天を、下の腕木は大地を表すとされます。

ドゴン人は、西アフリカ、マリ共和国の中央部に住む農耕民です。ドゴンの神話は天地創造^{てんち そうぞう}の神話をはじめとして、壮大な宇宙観^{しんわ}、世界観を持っています。ドゴン人は、特徴ある図形^{とくちよう}を規則的に用いた仮面を作る人々として有名です。仮面の踊りは、彼らの神話の世界^{あざ}を鮮やかに表現します。



死の世界と仮面

ドゴンの神話では、人間の過^{あやま}ちによって世界に死^しが出現^{しゆつげん}し、その混乱^{こんらん}を鎮めるために死者をかたどった仮面が作られるようになったと語られます。その後、狩人^{かりゆうど}が獣^{けもの}を殺すたびに、あるいは何か重大な事件が起きるたびに仮面が作られるようになりました。仮面のモチーフはシカ、サル、ウサギといった野生動物から人間、そして首長^{しゅうちよう}の家までさまざまです。仮面は死と、死^かに関わる儀礼^{ぎれい}に結びついています。死者をほうむる儀礼に仮面が登場し、仮面の力によって死者は生者の世界と切り離^{はな}されます。

死者を精霊^{せいれい}の世界へ送り出す喪明^{もあ}けの儀礼では、仮面をかぶった男たちが太鼓^{たいこ}の伴奏^{ばんそう}に合わせて踊ります。仮面にはそれぞれ決まった踊りがあり、神話に沿ったストーリーが演じられます。カナガ仮面は儀礼の最後に登場します。踊り手は仮面の飾りの先を大地に打ち当て^{はげ}激しく踊ります。この動きは鳥を表すとも、創造神^{そうぞうしん}が世界を創造する様子を表すとも言われます。

ほんかんだい

しつ

うちゅう

かち

本館第5室：こころの宇宙——価値

ヒンドゥーの神がみ：シヴァ

ヒンドゥー教には、実に多彩^{たさい}な神様がいます。その中でも、現在、ヒンドゥー教を信仰^{しんこう}する人びとの間で特に人気の高い神のひとりが、「シヴァ」です。シヴァは、宇宙^{うちゅう}の破壊^{はかい}をつかさどる神で、ブラフマー（宇宙^{そうつそ}の創造^{そうつそ}をつかさどる）、ヴィシュヌ（宇宙^{うちゅう}の維持^{いじ}をつかさどる）とともに、ヒンドゥー教の三大神と呼ばれています。シヴァは、両目の間に第三の目を持っており、彼が怒るときには激しい炎^{はげ}が出て、すべてを焼き尽くすとされています。

シヴァはまた、108種の舞踊^{ぶよう}を演じる「舞踊の神」ともいわれ、宇宙にあまねく満ちている力を示すナタラージャ（舞踏の王）の姿として表現されています。神話によると、シヴァと論争^{ろんそう}した異教徒^{いぎやうと}が怒って、虎^{とら}、蛇^{へび}、小人^{こびと}（無知^{むち}、暗黒^{あんこく}の象徴^{しょうちよう}。アパスマーラ）を作り、つぎつぎと攻撃^{こうげき}してきました。しかし、シヴァは笑いながら虎の皮をはいで身につけ、蛇を首に巻き、小人を踏みつけて踊り続けたといいます。この神話をもとにナタラージャの像が作られています。

シヴァは破壊の神とされていますが、破壊した世界^{さいけん}を再建する創造力も持つ神です。宇宙は破壊されることによって、創造、維持というサイクルを繰り返し続けます。ナタラージャの像は、シヴァのこうした宇宙的^{かつりよく}な活力を表現したもののなのです。



ほんかんだい しつ

うちゅう かち

本館第5室：こころの宇宙——価値

ヒンドウーの神がみ：ガネーシャ

ゾウの頭を持つガネーシャは、シヴァとその妃^{きさき}であるパールヴァティの息子です。どうしてガネーシャはゾウの頭をしているのでしょうか？その理由は次の通りです。

パールヴァティは、夫の留守中に自分の体の垢^{あか}を集めて人形を作り、それに生命を吹き込みました。こうして生まれた息子に彼女は満足し、用事をいいつけました。それは彼女の入浴中、家に誰も入れないように見張りをするのでした。そこへシヴァが帰ってきましたが、ガネーシャは父と知らず、母の言いつけどおりにシヴァを中に入れようとしませんでした。シヴァは怒ってガネーシャの首をはねてしまいます。

パールヴァティは息子の死を^{なげ}嘆き悲しみました。シヴァは^{あわ}哀れんで、この息子を生き返らせることにし、部下に命じてガネーシャの頭を投げ捨てた方向に探しに行かせました。しかし見つけることができず、最初に出会った動物、つまりゾウの頭を持って帰ってきたので、それをガネーシャの頭として取り付け、復活させたのです。

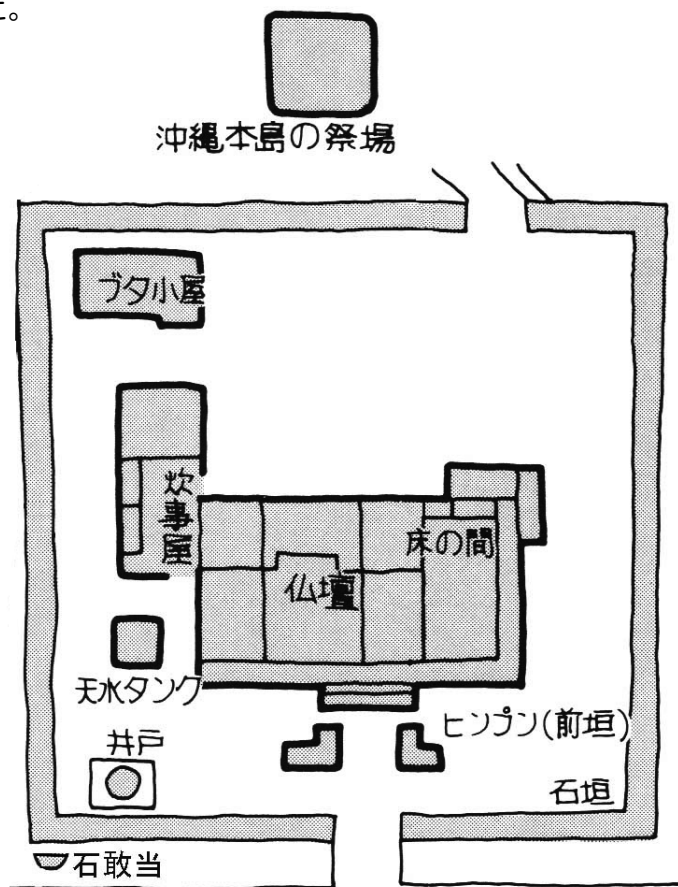
現在ガネーシャは、^{しょうがい}障害を取り除き、成功と幸運をもたらしてくれる現世利益^{げんせいりやく}の神として、また、富と繁栄^{はんえい}の神として信仰を集めています。



おきなわけん いしがきじま

沖縄県 石垣島の家

おきなわほんとう 沖縄本島よりもさらに南にあるなんせいしょとう 南西諸島は、あねったい 亜熱帯の島じまからなります。そのひとつである石垣島に、今から 140 年ほど前の 1871 年ごろ、りゅうきゅうこく 琉球国時代のしぞく 土族の住まいとして建てられた家をいちく 移築しました。



さいじょう 沖縄県 沖縄本島の祭場

アサギと呼ばれる さんらくきやうどう 村落共同 の祭場。毎年 きゅうれき 旧暦 の7月には ほうさく はんえい 豊作や繁栄をもたらすニレー神を迎える かいじんさい 海人祭が、女性たちだけで もよお 催されます。

きこう 気候と住まい：台風とともに暮らす

毎年 7 月から 10 月までに何度も台風におそわれる石垣島^{いしがきじま}の家には、いくつかの工夫がこらされています。その暴風^{ぼうふう}対策の工夫を紹介します。



- ① 豊富^{ほうふ}に採れるサンゴ石で石垣を高く積みあげる。
風が直接、家に吹きつけないようにという工夫です。

- ② 庭に防風林^{ぼうふうりん}を植える。
同じく、家に吹きつける風を少しでも弱めるための工夫です。

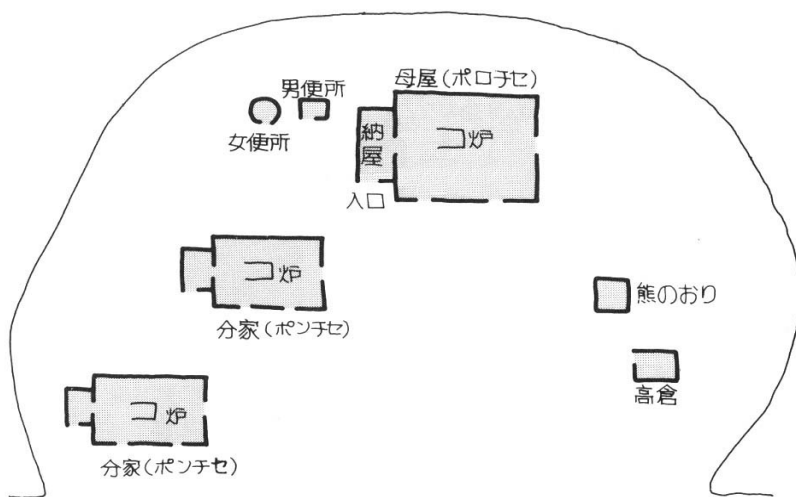
- ③ 屋根瓦^{やねがわら}をしっくい^{かた}で固める。
屋根が風で吹き飛ばされないように“重し”の役目をもつ屋根瓦、この石垣島の家では平瓦^{ひらがわら}（1 枚 1.3kg）と丸瓦^{まるがわら}（1 枚 1.9kg）を組み合わせ、およそ 1 万 7 千枚、25t もの瓦を使っています。さらに、瓦をしっくい^{かた}で塗り固めて、おさえています。

- ④ 母屋の柱^{おもや}をふやし、軒^{のき}を低くする。
「石垣島の家」と「山形^{がっさんさんろく} 月山山麓の家」とはおおよそ同じ面積ですが、石垣島を家の柱は 102 本、山形の家柱は 74 本とかなり違います。柱の数が多いのは、重い屋根をしっかりと支えるためです。軒下^{のきした}の高さは石垣島の家が 270 cm で、山形の家は 430 cm もあります。軒が低いことで、風は家の壁ではなく屋根の上を吹き飛んでいきます。

台風による被害を抑えるために、石垣島の人たちはいろいろな工夫をしてきましたが、まったく台風が来なくても、石垣島の人たちは困ってしまいます。この家の元^{もと}の持ち主^{ぬし}は、「井戸水は塩分があって飲めないからね」と言い、1953 年に水道^{てんすい}が引かれるまで、屋根にふった雨水^{てんすい}を天水タンクにためて飲料水に用いていた苦勞^{くるわう}を語ってくれました。台風は大量^{たきりょう}の真水^{まみず}をもたらしてくれる天からの恵みでもあるのです。

ほっかいどう 北海道 アイヌの家

ほっかいどう せんじゅうみんぞく
北海道の先住民族であるアイヌが、19世紀末ごろまで暮らし
いたコタン（村）を、アイヌの人びとの協力（さいげん）で再現（しきち）しています。敷地（おく）
の奥にあるのが両親（てまえ ふたむね）の手前（ぶんげ）の2棟が分家した子どもたちの家です。
アイヌの人びとは炉（ろ）を神様の寝床（ねどこ）と考えたため、家は炉を中心に
造られています。



けんちくざい とくちょう 【建築材の特徴】

やね かべ
屋根や壁に使われているのはイネ科の植物（アイヌ名：ラペンペ）
で、1本1本がストローのような中空構造（ちゅうくうこうぞう）になっています。これら
を束ねると厚い空気（あつ）の層（そう）ができ、断熱材（だんねつざい）と同じ役割（やくわり）をはたします。
アイヌは古くからこの資材（しざい）の特性（とくせい）を活かし、自然の断熱材（だんねつざい）で家を
まるごと覆（おお）うことで、寒い時期（ひかてき）でも比較的あたたかく暮らすことが
できたのです。

かんたいへいようこうえき
環太平洋交易

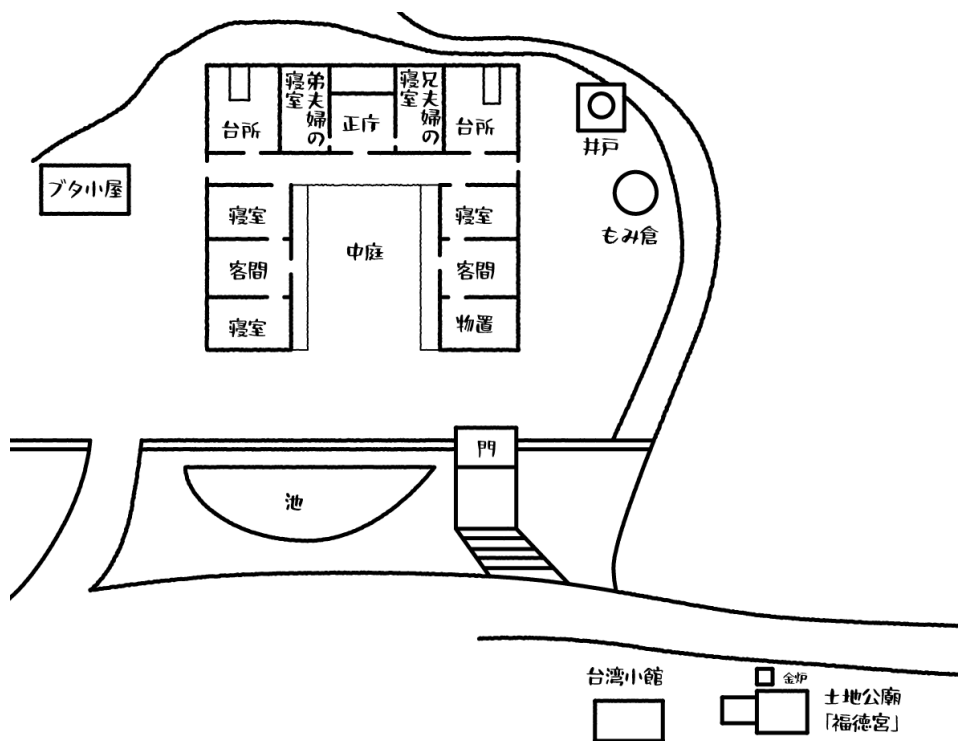
アイヌ民族は、東北地方の北部から北海道、樺^{からふと}太南部、千島^{ちしまれつとう}列島にかけて古くから暮らしてきた先住^{せんじゅうみんぞく}民族です。かつてはアイヌモシリ（アイヌ民族の大地）の豊かな自然環境^{しぜんかんきょう}を基盤^{きばん}として、採集^{さいしゅう}・狩猟^{しりよう}・漁労^{ぎょうろう}を中心とした生活を営^いむ一方、本州^{ほんしゅう}や大陸^{しよみんぞく}の諸民族とも活発な交易^{こうえき}をしていました。アイヌによる交易は、大陸と日本をつなぐ架^かけ橋の役目を果たしていたと言われます。

アイヌは製鉄^{せいてつ}の技術^{ぎじゅつ}を持っていませんでした。そのため、南方では和^わ人との交易で、生活必需品^{ひつじゅひん}である鉄の小刀^{なべ}や鍋を手に入れました。米や酒、タバコなども好まれました。その代わりアイヌは和人に、テン、キツネ、アザラシなどの毛皮^{しん}や、清（現在の中国）からもたらされた織物^{おりもの}などを渡しました。これを和人は蝦夷^え錦^{ぞにしぎ}と呼び珍重^{よちんちよう}しました。北方では、山丹人^{さんたんじん}と呼ばれた大陸のツングース系の人びとと交易し、アイヌは交易品^{こうえきひん}として毛皮のほか、和^や人より入手した鉄製品の一部を渡していました。山丹人からの交易品には、矢羽^{やばね}に用いるワシの羽根^{きば}や、薬とするセイウチの牙^{きば}などがありました。蝦夷錦も山丹人との交易^えで得たものでした。

こうした交易は「環太平洋交易^{かんたいへいようこうえき}」と呼ばれています。江戸時代、徳川幕府が鎖国^{さこく}を始めてからもこの交易は引き続きおこなわれ、中国の織物^{けいぶ}は長崎からばかりでなく、アイヌを経由^{けいゆ}しても入ってきました。そのため、この「環太平洋交易」を、「北のシルクロード」と呼ぶ研究者もいます。

たいわん の う か 台湾 農家

この家は中国大陸南部 ^{ふっけんしょう} 福建省 から ^{いじゅう} 移住してきた ^{かんぞく} 漢族の伝統的な農家を ^{ふくげん} 復元したものです。中国南部の ^{けんちくようしき} 建築様式の流れをくみながら、台湾の ^{ふうど} 風土に合わせ、^{ねったい} 熱帯の強い ^{ひざ} 日差しをさけるため、また ^{ぼうふうう} 暴風雨の ^{しんにゆう} 侵入を防ぐため、壁を厚くし ^{ふせ} 柱廊で家屋の前面をとりまき、^{やねがわら} 屋根瓦を ^{しっくい} 漆喰で ^ぬ 塗り ^{かた} 固めるなどの工夫があります。



とちこうびょう ふくとくぐう 【台湾の土地公廟：福德宮】

「台湾 農家」の向かいにある建物は「福德宮」という名前の土地公廟です。^{ふくとくせいしんとちこう} 福德正神土地公と呼ばれる神さまがまつられています。土地公は民間信仰における土地の ^{しゅごしん} 守護神です。

歴史と住まい：ふるさととのつながり

山がちな土地で ^{しょくりょう}食糧 不足に苦しんでいた中国南部の人びとは、17 世紀なかばから 19 世紀末にかけて、台湾に新しい農地を求めてたくさん移り住みました。この家は、そのような ^{ふっけんけいかんみんぞく}福建系漢民族の伝統的な農家で、1917 年に建てられた家をモデルとし、1950 年代頃の生活を復元しています。

【三合院】

^{なかにわ}中庭を中心に ^{さんぽう}三方に ^{むね}棟が並び、このような建築形式を三合院と呼び、中国南部の流れをくむものです。中央の部屋 ^{せいちょう}正庁では、祖先や ^{どうきょう}道教の神々をまつっています。正庁を背にして左手が ^{かちょう}家長である兄夫婦の部屋、右手が弟夫婦の部屋で、左右から伸びる棟は、成長した子どもたちの部屋や農具置き場として使われます。こうした部屋 ^わ割りは、左を ^{ゆうい}優位とし、^{ちようよう}長幼の ^{じょ}序（年上と年下の ^{じょれつ}序列や ^{じゆんじょ}順序のこと）を重んじる考え方に基づくもので、屋根の高さにも反映されています。また、赤レンガを ^う積みあげた壁や、^{すや}素焼きの ^{かわら}瓦 を重ねた屋根なども伝統的な三合院の特徴です。

☞ 兄と弟、どちらの部屋の屋根が高いかな？正面からチェックしてみましょう。

【新天地で身を守る住まい】

台湾へ移住した人びとは、争いや ^{とうぞく}盗賊から身を守るために、家のまわりにトゲのある竹を植えました。また、窓を小さく、少なくし、さらにぶあつい木の ^{とびら}扉に ^{がんじよう}頑丈なかんぬき（扉が開かないようにする ^{よこぎ}横木）をつけました。

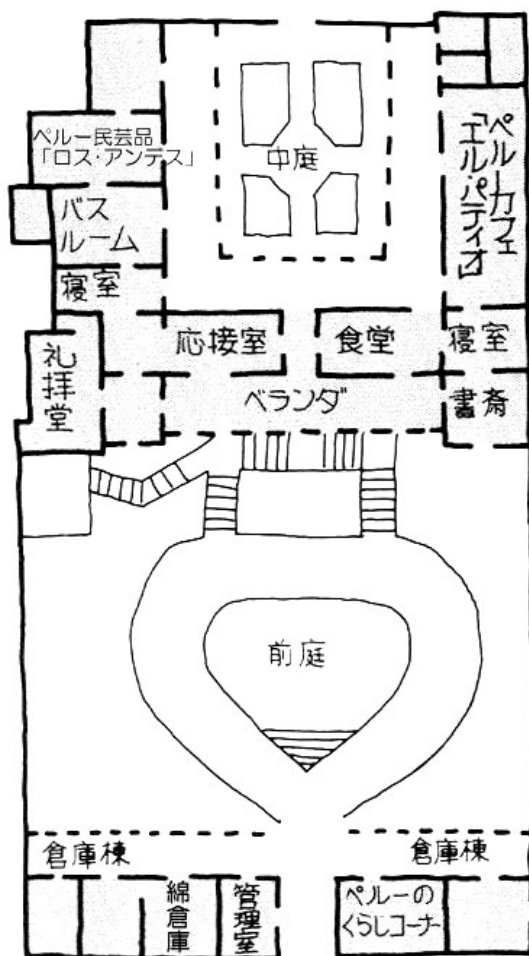
☞ ほかに、^{しんにゆう}悪霊の侵入をふせぐための工夫もあります。探してみましょう。

【風水思想】

古来より中国には、風水という理想的な環境を ^{さだ}定める考え方があります。家屋は南向きに建て、背後に山林をひかえ、前面に池（水）を配すると良いといわれます。家族の健康や、家の ^{はんえい}繁栄を願う人びとは、風水師に相談し、^{ちけい}地形や ^{ほうい}方位を ^{かんてい}鑑定してもらいます。

だいのうえんりょうしゅ ペルー大農園 領主 の家

この家は、アシエンダと呼ばれた大農園の領主の邸宅を復元したものです。ペルーの首都リマから約70キロほど離れた海岸地方のチャンカイ谷に建つ「カキ」という名前の大農園の館をモデルとしています。



【アシエンダ】

アシエンダとは、アメリカ大陸の旧スペイン植民地において、スペイン系領主が先住民のインディオやアフリカの黒人、アジア人らを小作人とし、その労働力を使って大規模な経営をおこなった農場のことで、16世紀末頃から発達したものです。農地改革で解体されるまで（ペルーでは1969年）、牧場や商品作物の栽培により、莫大な収益を上げていました。

けんちくようしき 【建築様式】

中庭（パティオ）を囲んで回廊、そして居室が配置されています。この様式は、もとは8～15世紀にかけてイベリア半島を支配していたイスラーム世界によってもたらされたものです。

せんじゅうみん いしやう でんとう がいらい
 ペルー先住民の衣装：伝統と外来のミックス

インカ帝国^{ていこく}は、1532 年にスペイン人によって征服^{せいふく}されましたが、その後、500 年近くたった現在でも、アンデス高地に住むケチュア人は、腰織^{こしばた}と呼ばれる古くから伝わる織り機^{おき}を使って、ポンチョ^{かたか}、肩掛け^{がら}、帯^{たこ}などを作っています。伝統的な柄^{がら}は、原色^{あさ}を巧みに組み合わせて表現し、見た目にとっても色鮮やかです。ケチュア人の衣装は、ヨーロッパから入ってきたズボンやスカートに、これら固有^{こゆう}の要素^{ようそ}を組み合わせたスタイルが一般的^{いっぱんてき}。帽子^{ぼうし}は、山高帽^{やまだか}や皿型帽^{さらがた}が好まれます。



どうぶつ
 アンデスの動物：アルパカとリャマ

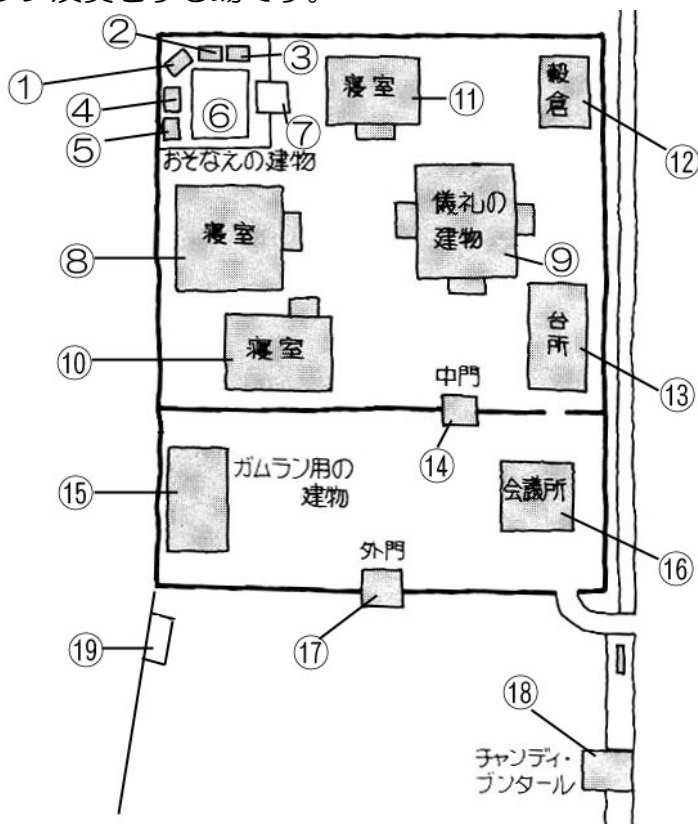


アンデス高地では、古くからラクダの仲間である「アルパカ」や「リャマ」が飼育^{しゆく}されています。どちらもおとなしい性格です。毛がモコモコしてふっくら見えるのがアルパカ（写真左）で、そのやわらかい上質^{じょうしつ}な毛は、衣類を作るのに適^{てき}しています。一方、リャマ（写真右）はアルパカに比べてスマートな印象。毛はゴワゴワしており、衣類を作るのにには適していません。しかし、アルパカに比べ、一回り大きく力も強いので、農作物などを運ぶ時には大活躍^{だいかつやく}します。



インドネシア バリ島貴族の家

赤道直下の火山の島、バリ島。ヒンドゥー文化の影響を受けたこの地の社会には、貴族と平民をわけるカーストを模した制度があります。展示家屋は貴族階級の屋敷をモデルに復元したもので、敷地を内壁で3つにわけて建物を配置しています。いちばん奥の①～⑥はもっとも神聖な区画で、ヒンドゥーの神がみや祖先をまつ屋敷内の寺院(祭祀場)があります。⑧～⑬の中央部分は、儀礼の建物を中心に寝室、穀物庫、台所が建ち並ぶ生活の場であり、⑮～⑯の手前の部分は、お祭りや儀礼のときに余興として踊りやガムラン演奏をする場です。



インドネシア バリ島の衣装 いしやう

バリの女性の普段着は、カインと呼ばれる無縫製の带状の一枚布を体に巻くものでした。今ではイスラームやヨーロッパの影響もあり、ヒンドゥー教を信仰するバリ島でも女性は肌を隠すようになり、ブラウスやスカートといった装いをしていますが、お祭りや結婚式、舞踊ともなると華やかな衣装を身にまといまう。

バリの舞踊には大別してワリ、ブバリ、バリバリアンという3種があり、舞踊によって衣装は異なります。ワリは、寺院内の儀式で神様のために踊る神聖なものです。ブバリも神聖な舞踊ですが、物語にそって舞います。バリバリアンは娯楽性が高く、神様と人間の両方が楽しむものであり、たくさんの人が観覧できるように、寺院の前の集会所などで踊ります。

マルハナバチの踊り（オレッグタンブリリンガン）

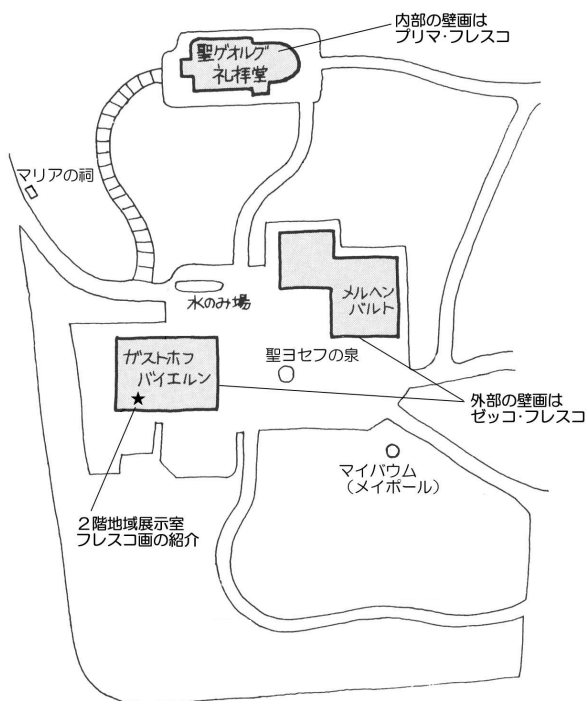
バリバリアンには、レゴンやバリスといった有名な舞踊のほかに、オレッグタンブリリンガンという舞踊があります。“オレッグ”は「柔らかく、しなやかな」、 “タンブリリンガン”は「マルハナバチ」という意味です。この舞踊の女性役は、冠とブンガ・マス(金の花)というかんざしで飾り立てた女王様のような衣装をまといまう。

物語は、伝統的なバリの恋物語を表しています。美しい花園で恋をした若い男女のハチが舞い踊る様子は、若いバリの人びとの求愛の儀式を象徴しています。今日バリでは盛んに新たな舞踊が作られており、これも1950年代に創作されたものと言われています。



ドイツ バイエルン 州^{しゅう} の村

ドイツ南部、バイエルン州のガルミッシュ・パルテンキルヘン^{しゅうへん}周辺^{しゅうけい}をモデルとして、のどかな美しい村の情景^{ふくげん}を復元しています。村は聖ヨセフの泉^{せい}を中心に、色あざやかなフレスコ画^がの外壁^{がいへき}をもつ2棟の民家と、丘の上の礼拝堂^{れいはいどう}からなります。



ガルミッシュ・パルテンキルヘンは、バイエルン州^{しゅう}都ミュンヘンの南方90km、オーストリア国境近くにあるアルプス山麓^{さんろく}の村です。小さい町ですが、冬のスポーツ、温泉療養^{りょうよう}、夏の避暑地^{ひしょち}として多くの観光客が訪れるリゾート地として有名です。このあたりの家並み^{とくちよう}の特徴^{がいろ}は、街路にそってならぶ商店や民家の外壁に美しい壁絵が描かれていることです。この壁絵は250年の歴史を持ち、「風の絵」と呼ばれ、またその壁絵を描く画家は「風の画家」と呼ばれています。

風の絵とその技法^{ぎほう}

「風の絵」という名前のいわれは、そよ風のような手早さ^{てばや}で描きあげなければならぬフレスコ画特有の描き方^{えが}に由来^{がとくゆう}します。リトルワールドのフレスコ画は、2つの技法で描かれています。ひとつは礼拝堂内部のプリマ・フレスコ、もうひとつは2棟の民家の外壁に見られるゼッコ・フレスコです。それぞれ次のような特徴^{れいはいどうないぶ}があります。

<プリマ・フレスコ^{しんせい}（真正フレスコ）>

壁の石灰モルタルが湿^{しめ}っている間に、顔料^{がんりょう}を水とともに浸透^{しんとう}させる技法です。みずみずしい美しい色調^{しきちよう}ですが、一日に描く範囲が限られます。

<ゼッコ・フレスコ^{かんしき}（乾式フレスコ）>

壁の石灰モルタルが乾燥^{かんそう}した状態^{じょうたい}で、顔料^{がんりょう}を水ガラスで溶いて浸透^{しんとう}させる技法です。風、雨、陽光による褪^{たいしよく}色に強く、外壁に適^{てき}していますが、描写時^{びやうしゃじ}と乾燥後の顔料^{はっしよく}の発色^さに差があります。



ゼッコ・フレスコ画

「ガンブリーヌス」

ビールの国ドイツでは、ガンブリーヌスはゲルマン人にビール造りを教えた神様（あるいは王様）。



プリマ・フレスコ画

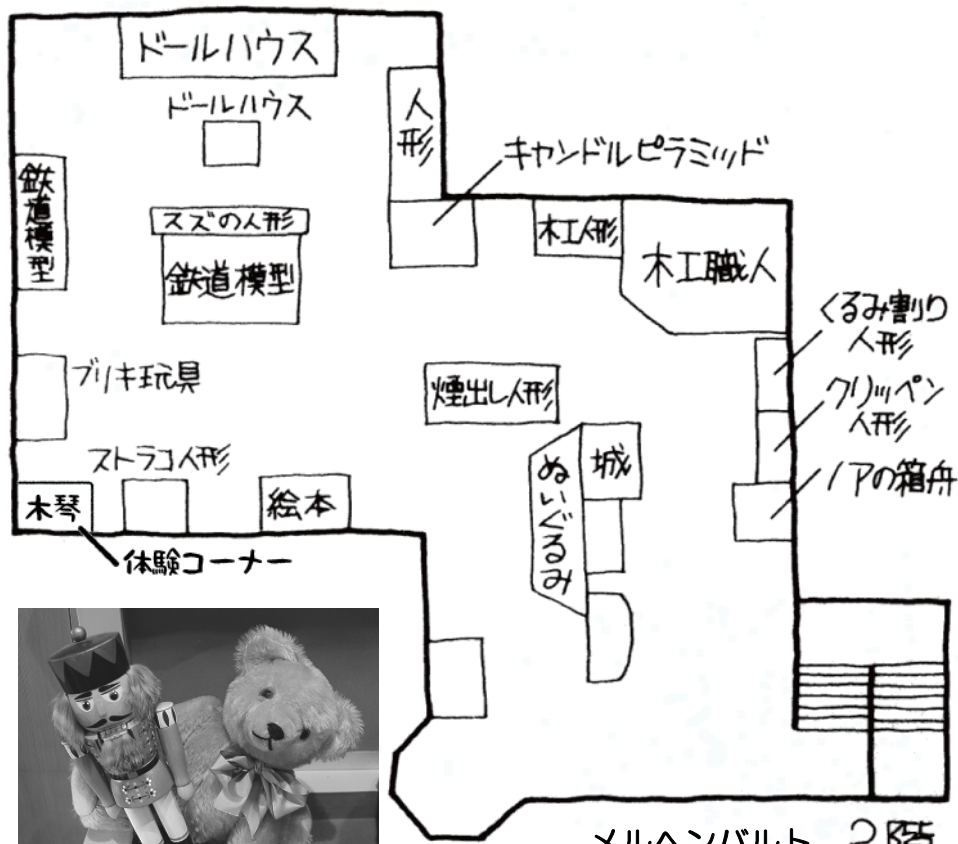
「聖母の戴冠^{せいぼ たいかん}」

父なる神、その子イエス・キリストとハトの姿の聖霊^{せいれい}から黄金^{かんむり}の冠を授かり祝福^{さす しゅくふく}を受けるマリア。

ドイツ バイエルン 州の村

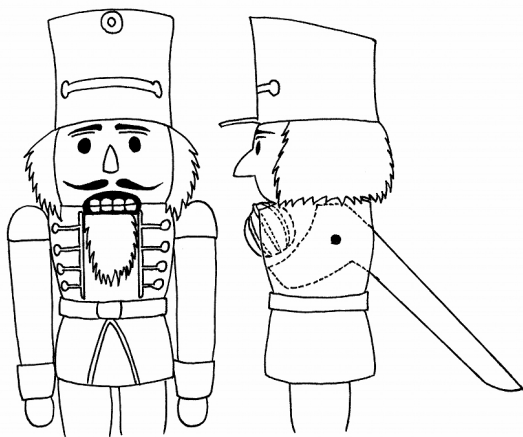
おもちゃ 王国ドイツ

世界で初めて 産業としておもちゃ作りを始めたドイツ。今でもおもちゃ王国として 有名な国です。世界的に 人気のあるテディベアもドイツで 誕生しました。メルヘンバルト2階 玩具展示室では、木製やブリキ製のおもちゃ、ぬいぐるみなど、今なお世界中で 愛され 続ける温かみあふれる手作りのおもちゃをご覧ください。



クルミ^わ割り人形

口^{くち}にクルミを入れて、背中のレバーを下に動かすと、クルミがパカッと割れるしくみになっています。あごとレバーはつながっています。人形には大小さまざまなタイプがあり、実際にクルミを割ることができるのは、口にクルミが入る大きなものだけです。人形は王様や

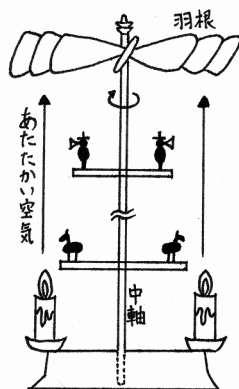


兵隊^{へいたい}などの人物がモチーフになっていることが多く、日頃^{ひごろ}いばっている人に固いものを噛^かませてやれという皮肉^{ひにく}の意味が込められています。

キャンドルピラミッド

かわいくておしゃれなキャンドルピラミッド。ろうソクに火を灯^{とも}すと、そこから昇^{のぼ}る温められた空気により、上にあるプロペラのような羽根^{はね}がゆっくりと回転^{かいてん}しはじめます。

羽根の^{なかく}中軸に取り付けられた^{えんばん}円板の上にいる人形たちもメリーゴーランドのようにくるくる^{まわ}回ります。



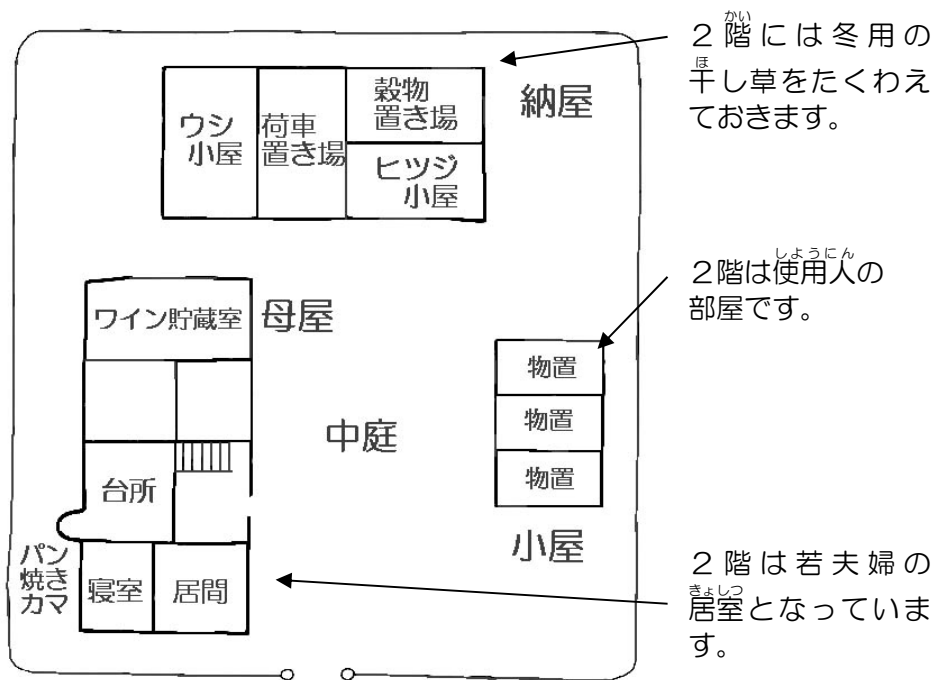
テディ・ベアの“テディ”とは？

ぬいぐるみの歴史の中で、変わらず広く親しまれているテディ・ベア。クマのぬいぐるみの代名詞^{だいにめいし}ともなっている「テディ」は、アメリカ第26代大統領セオドア・ルーズベルト^{だいてうりよう}の愛称です。クマ狩りに出かけたルーズベルトが小グマを助けたというエピソードからヒントを得て、ドイツのマルガレーテ・シュタイフが1903年から製作をはじめ、一躍^{いちやく}世界中にその名が広まり高い人気を得ました。

フランス アルザス地方の家

フランス^{とうほくぶ}東北部、ドイツと^{こっきょう}国境^{せつ}を接するアルザス地方で、ウシやヒツジを飼うとともに、ムギ、ジャガイモ、トウモロコシ、ブドウなどを栽培している農家を復元^{ふくげん}しています。

庭を囲むように母屋、納屋、小屋を配置し、1850年代、アルザスの農村に伝統的な暮らし^{さいげん}が残っていた時代の様子を再現しています。



【内陸性の気候】

パリから東へ500kmにあるアルザス地方は、西にヴォージュ^{さんみやく}山脈があるため、大西洋の影響^{えいきよう}をあまり受けず、やや内陸性の気候となっているため、雨は年間800mmほどと比較的^{ひかくてき}少なく（リトルワールドのおよそ半分）、夏暑く、冬寒い土地柄^{がら}です。

アルザスの伝統衣装

アルザス地方の女性の伝統衣装は、ギャザースカート、黒い胸飾りがついたブラウス、頭には蝶結びのリボンをつけたものが一般的です。リボンをつける習慣は、19世紀初めから広まったとされています。男性は、黒いズボンと上着、赤いベストを着て、帽子をかぶります。女性のリボンは信仰する宗教によって大きさが異なり、大きいものはプロテスタント、小さいものはカトリック教徒であることを表しています。



出典：「Mon Village」, Hansi

コロンバージュ（木骨構造）の家

母屋は、1582年に建てられたものです。リトルワールドへ持ってくるために解体した1985年まで、9代にわたって住まれていました。3階建て、白いしっくい壁に柱や筋かいなどが浮き出ている点が特徴です。このような建築様式は、中部ヨーロッパ独特のもので、コロンバージュ（木骨構造）と呼ばれています。筋かいには、「ムギの穂」や「アンドレの十字架」のデザインが見られます。



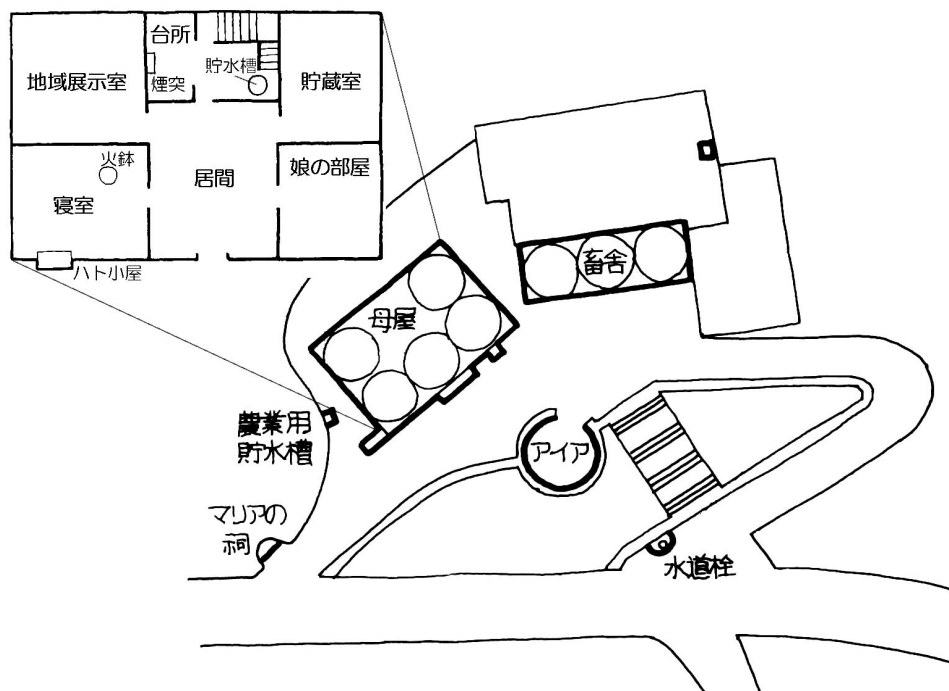
さがしてみましょう

雨戸にあいたハート型の穴は、明かりとり。
また、邪視をふせぐ魔よけの意味ももっています。



イタリア アルベロベッロの家

イタリア半島南部、プーリア州アルベロベッロ^{こうがい} 郊外の農家をモデルに^{おもや} 母屋、^{ちくしゃ} 畜舎などを^{ふくげん} 復元し、地中海性気候の^{ふうど} 風土のもと、ウシを^か 飼いながらオリーブなどの^{かじゆ} 果樹を育てる農家の暮らしを^{さいげん} 再現しています。



【^{じゆんすい} 純粋 ^{つく} な石 造りの家】

アルベロベッロの伝統的な家屋は、とんがり^{ぼうし} 帽子の屋根を持つことが^{とくちゆう} 特徴です。屋根は平たい石を^う 積み上げてつくり、このような屋根をいくつか持つ家屋をトゥルツリと呼びます。トゥルツリは、床、壁、^{かべ} 天井、^{てんじよう} 屋根すべてを石で^{つく} 造ります。材料は、アルベロベッロ^{きんこう} 近郊で採れる^と 石灰岩^{せっかいがん}です。

歴史と住まい：脱税が生んだ世界遺産

【地名の由来】

“アルペロベッコ”という舌をかみそうな名前は、「美しい木」という意味です。現在はゆるやかな丘陵地帯にオリーブやブドウ、アーモンドなどの畑がひろがっていますが、かつては檜の森であったため「美しい樹木のある森」と呼ばれていました。

【アルペロベッコ集落のはじまり】

そんな美しい森を開墾し畑をひろげ、今のアルペロベッコに集落ができたのは、500年ほど昔のことです。



【王さまと領主】

この頃、ここはある王さまの領土で、王さまに任命された領主が支配しており、王さまは、新しい住民や新築の家を報告して税金を納めろと領主に命令していました。家の軒数で税金の金額を決めていたのです。

【脱税】

悪いことを考える人は古今東西どこにでもいるようで、このアルペロベッコの領主は、王さまの命令に背き税金を逃れる方策を思いつきました。

“家の数で税金が決まるのなら、家の数を減らせばいい、家をいつでも壊せるように造ればいい。” 何とも乱暴な思いつきで、農民たちはトゥルッリを造らされ、住まわされたのです。

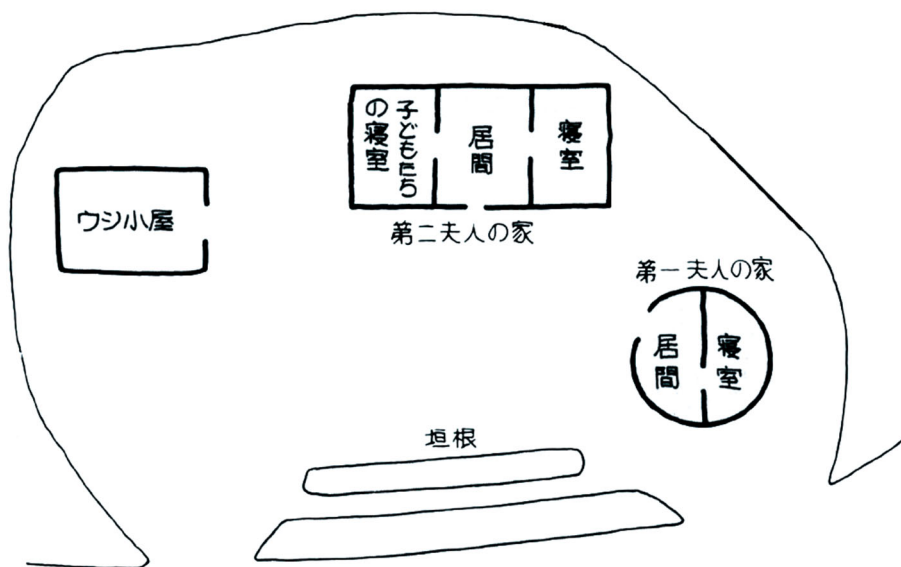
【世界遺産】

セメントなどを使わずに単に石を積み上げただけ（空積み）の家ならば、王さまの役人が不意に視察にきても、すぐに屋根を壊してやり過ごすことができ、造り直すことも簡単でした。簡単とはいっても住民にとっては大変な苦役でした。しかし、18世紀末まで続いた歴代領主の脱税行為のもと、トゥルッリ造りの技術は進歩しました。

トゥルッリの街アルペロベッコが生まれ、発展し、今日では人類共通の文化としてユネスコの世界遺産にも指定されています。

タンザニア ニャキュウサの家

ニャキュウサの人びとは、東アフリカ、タンザニア南西部の山地、^{ひょうこう}標高500～2000mのところに住んでいます。彼らが住むニャキュウサ・ランドは年間降雨量 2500mm 以上と雨に恵まれ、^{のうこう}農耕に^{てき}適した土地です。^{かちく}家畜としてウシを飼いながら、^かバナナ、^{さいばい}トウモロコシなど 40 種近くの農作物を栽培して暮らしています。



丸い家と四角い家：大きさの違いはえこひいき!?

ニャキュウサは^{いっふたさいせい}一夫多妻制の^{けっこんせいど}結婚制度をもっており、^{つま}妻たちはそれぞれ別の家をもっていますが、一家の^{しゅじん}主人の家はありません。円形の家は四角い家よりも古いタイプです。第1夫人の子供たちはすでに親元を離れ、畑のそばに新しい家を建て、共同生活を始めていますが、第2夫人の^{そうてい}子供たちは幼いので家が大きいという想定です。

ニャキュウサ女性の衣装：カンガ

【カンガとは？】

カンガはタンザニア、ケニアを中心とした東アフリカ（スワヒリ地域）に住む女性に広く着用されています。その始まりは19世紀中頃、海岸部に住む女性たちによって考えられ、広まったといわれています。

【カンガの着かたと特徴】

カンガは大きさ 1.6m×1.1m 程度の本綿の布です。2枚で1組とするのが基本です。

1枚は胸から下を覆い、もう1枚で上半身を覆ったり、頭に巻いたり、肩にかけたりして使います。同じ柄のものが2枚1組で売られますが、着る時には上下同じ柄でそろえることもあれば、別々の柄を組み合わせることもあります。



巻き方は何通りもありますが、腰に巻きつけるスカートスタイルが多く見られます。また、カンガは赤ちゃんの抱ひも紐やゆりかごにも利用されます。日常の服としても、祝い事や祭りのおしゃれ着としてもカンガは活躍します。

プリントされる柄は無数にあり、次々と新しいデザインが出回っています。カンガにはプリント柄のほかに、スワヒリ語の格言やメッセージが記されています。

【カンガから見えるアジアとのつながり】

カンガはタンザニア、ケニアのほかにもインドやマレーシア、中国でもデザインされ作られています。スワヒリ語を使っていない国でスワヒリ語が印刷されているのは興味深いことです。カンガに限らず多くの物がアフリカとアジアを行き来しています。東南アジア諸国（タイ、マレーシア等）では、衣料品、日用雑貨、電化製品などを買い付けに来たアフリカからの交易人の姿が見られます。その中にはニャキュウサ人の交易人もいます。

南アフリカ ンデベレの家

アフリカの^{さいなんたん}最南端、南アフリカ共和国の^{きょうわこく}内陸部、^{ないりくぶ}標高^{ひょうこう}900～1500mの高原地帯に住む^{みんぞく}民族の^{かおく}家屋です。ンデベレの人びとは、^{こうだい}もともとは広大なサバンナでウシやヒツジを飼う^か牧畜民^{ぼくちくみん}でしたが、現在では大部分の人がプレトリアやヨハネスブルクといった都市^{のうじょう}や^{はたら}農場で働いています。

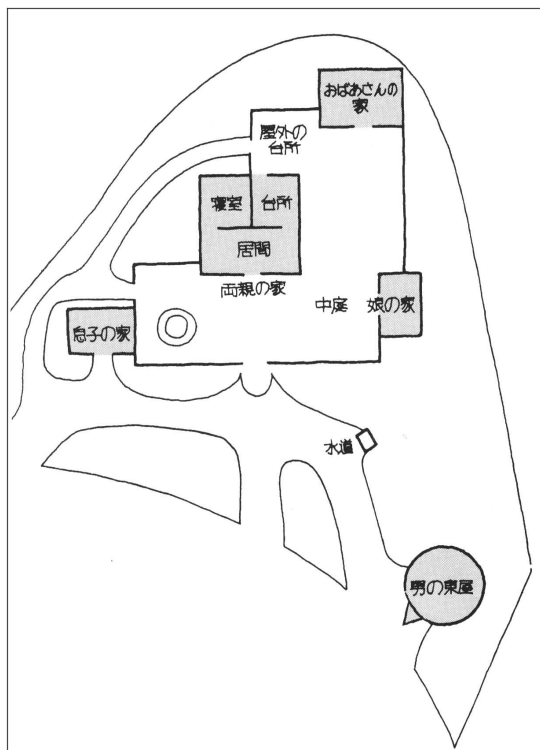
【創出された装飾文化】

ンデベレは、都会近くに住んでいたため、早い時期から白人文化の^{えいきよう}影響を強く受け、昔ながらの^{しゅうかん}習慣を失い、新たな文化を^{つく}創り出していった民族です。

色あざやかな^{きかがく}幾何学模様^{もよう}の壁絵^{かべえ}をもつ家や、ガラス製の^{せい}ビーズ細工^{ざいく}の装飾品^{そうしよくひん}をつけ、アクリル製のカラフルな毛布^{せい}をまとう民族衣装^{いしよう}などは、^{きんりん}近隣の他の民族には見られないンデベレ^{どくじ}独自の文化です。

【壁絵は民族の自己主張】

ンデベレの壁絵の特徴は、あざやかな色を大胆に使った幾何学模様を^{さゆうだいしよう}左右対称に配置^{はいち}するところにあります。こうした壁絵は南アフリカだけでなく、世界でも^{めすら}珍しいものです。壁絵は、「ここに住んでいるのはンデベレです！」という自己主張のあらわれとなっています。



かべ え えが 壁絵を描く女性たち … 2016年の壁絵修復から しゅうふく

壁絵は、女性たちの手によって描かれます。2016年の秋には、南アフリカより来日したンデベレ人女性により、21年ぶりに壁絵が美しく修復されました。このときは最初の復元でも描き手として来日したレアさんをリーダーとして、年齢の異なる4人が協力して作業を進めました。ここでは、簡単に修復の様子をふりかえってみましょう。

①リーダーのレアさんがデザインを決め、壁に軽く粗い線を描きます。次に、線で囲まれた部分に塗る色を少しだけ目印としてつけておきます。

使う色に決まりはなく、描き手のセンスで選びます。

②ほかの描き手たちは、目印をたよりに枠内の色を塗っていきます。

塗料は水性ペンキを使います。比較的短時間で乾くため、重ね塗りがしやすい特徴があります。

③粗い線を、太くまっすぐな線へと引きなおします。このとき、定規はいっさい使いません。

④はみ出してしまったり、とちゅうで線の太さが変わってしまったりすると、あとから重ね塗りをして修正します。

輪郭をととのえるのは最年長のローズさんが担当しました。このように細かい部分までこだわった作業によって、壁絵が美しく仕上がりました！



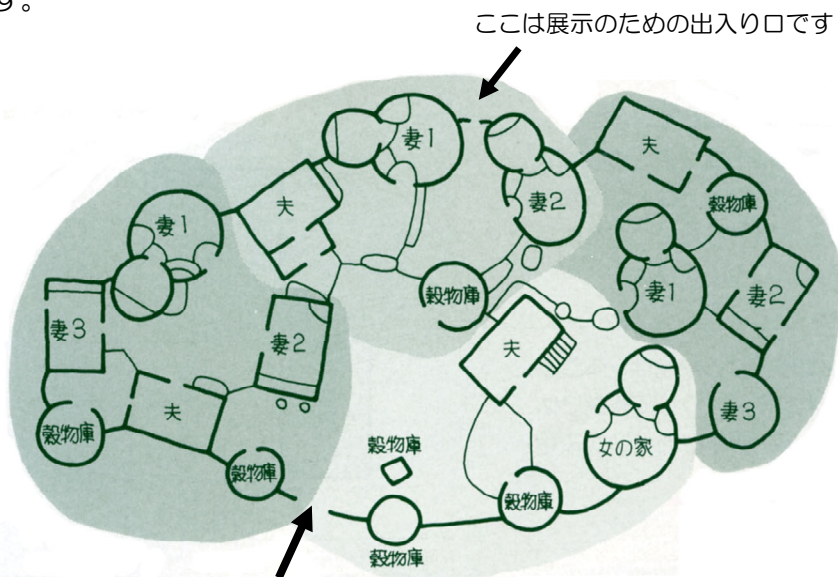
▲目印を描くレアさん（中）と描き手たち



▲線をととのえるローズさん

西アフリカ カッセーナの家

西アフリカの国ブルキナファソのカッセーナの人びとは、サハラ砂漠^{さばく}の南に広がるサバンナ地帯で、モロコシやトウジンビエ等の雑穀^{ざっこく}を栽培^{さいばい}する焼畑^{やきはた}農耕^{のうこうみん}民です。一夫多妻制度のもと、同じ屋敷^{いっふたさいせいど}地に血縁^{やしきち}関係^{けつえん}にある男たちとその複数の妻^{つま}と子供^こたちが暮^くらします。四角い家には男性、ヒョウタン型や丸型の家には（四角い家にも）女性や子供が住みます。壁の幾何学模様を描くのは女性の仕事で、女性たちが好みで模様を決めて描きます。



こちらが本来の出入り口です。

本来の出入り口は西か南で、東は悪い力の来る方向とされる。

複数の複婚(一夫多妻制)家族が集住
4人の男とその9人の妻の4世帯

【砦^{とりで}のような屋敷^{やしき}】

建物を土塀^{どべい}でつないで囲^{かこ}んでいるのが特徴^{とくちょう}です。この地域はかつて近隣の民族間の争いが激しく、敵の侵入^{きんりん}を妨^{みんぞくかん}げるために、家屋を土壁^{はげ}でつなぎ、屋敷全体を砦^{とりで}のようにしました。平らな屋根は農作物の干し場^ほであるとともに、敵を見張り迎え撃^{みは}つ所^{むか}でもありました。

カッセーナ人の“ヒョウタン文化”

【ヒョウタンの使い道はたくさん】

ヒョウタンはアフリカ起源^{きげん}の植物と考えられています。カッセーナ人が住む西アフリカのサバンナ地帯では、野生のもの^{さいばい}、栽培されたものなど、形も大きさも色々なものがあります。ヒョウタンは軽く、液体や細かい粉を入れることができ、殻^{から}が固く空気を通さないという性質^{せいしつ}があります。人々はこの性質を最大限に利用してさまざまな使い方をしてしています。飲み物、食べ物を入れる食器、おたまやひしゃく、ボウル等の調理器具^{ちようり きぐ}として、収穫^{しゆかく}した穀物^{よく}を選び分ける道具、大きなものは洗濯^{せんたく}たらいや赤ん坊の行水^{ぎようすい}用に、小さなものは小物入れや畑仕事用の種入れ容器に、他には太鼓^{どう}の胴^{もつ}や木琴^{きん}の共鳴器^{きようめいき}などにも利用されます。

【女性とヒョウタン】

カッセーナの主婦は、ザノと呼ばれるヒョウタンのモニュメントを持っています（右図 参照^{さんしやう}）。油できれいに磨き上げられた球形または半球形のヒョウタンをいくつも重ねた物を自分の家の中央に吊^つるして飾^{かざ}ります。いちばん底のヒョウタンの器には、カリテ・バター（アカテツ科の野生樹^{やせいじゆ}の実から取る油脂^{ゆし}、英語ではシア・バター）が入っています。カリテ・バターは調理^{なんこう}、軟膏^{せっけん}、石鹸、美容クリームなどに使います。使い続けていくうちにひびが入ってしまったヒョウタンを縫い合わせるのは女性の役割です。少し割れてしまったくらいで捨てることはなく、大事に直して使います。女性の生活とヒョウタンは深く^{かか}関わり合っているのです。

【サバンナのエコな暮らし】

ヒョウタンは道具に加工しやすいように生育途中^{せいいくとちゆう}で人の手が加えられます。収穫した後に形や大きさに合わせて加工され、修理をしながら大事に使い切った後、ヒョウタンはサバンナの土に還^{かえ}っていきます。このようにヒョウタン製の道具はとてもエコであるとも言えます。サバンナに住む人々は、自然の素材^{さいだいげん}を最大限に活用して暮らしているのです。

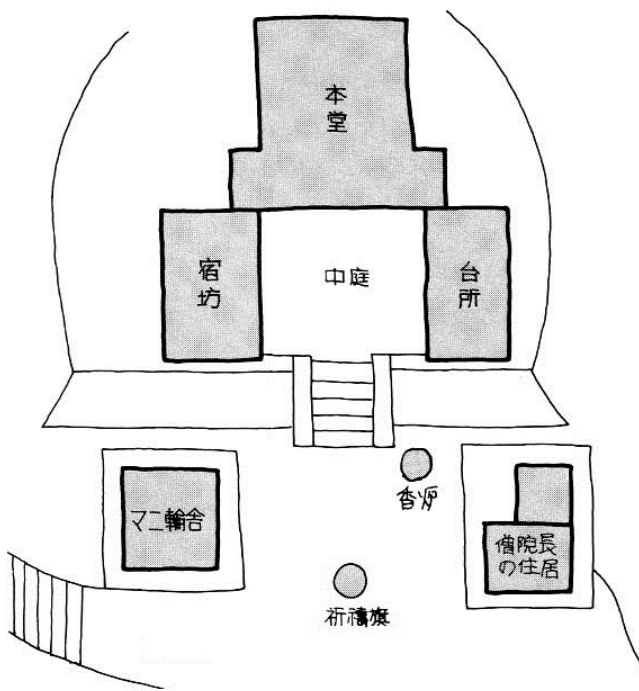


ぶっきょうじいん

ネパール 仏教寺院

この展示は、ネパール東部、標高約 3000mのヒマラヤ南腹にあるチベット仏教のニンマ派に属する、タキシンド寺院をモデルに復元したものです。

タキシンド寺院の本堂には釈迦如来を安置し、周囲の壁や天井にはチベット仏教独特の仏画や曼荼羅が極彩色でびっしりと描かれています。敷地内には宿坊やマニ輪舎が建ちならび、現地ではラマ僧が暮らしながら修行に励んでいます。この寺院は、近くに住むシェルパ人（16世紀にチベットから移住し、ヤクの放牧や農耕を営みながら、ヒマラヤ越えの交易にも従事していた人びとで、最近では、登山ガイドとして有名です。）の信仰の中心になっています。



チベット仏教とは

インドにおこった仏教は、7 世紀ごろからヒンドゥー教やヨーガなどの影響を受けながら密教として発達しました。その後、チベットに取り入れられ、チベット仏教として今日まで受け継がれています。

◆ 五感を研ぎ澄まして修行する

チベット仏教の大きな特徴は、仏教の究極の目的である悟りの境地を生きた身で得ること（即身成仏）を目指すことです。そのため、真理を頭で理解するだけでなく、知覚、視覚、聴覚に訴えるものを使って修行に励みます。原色で描かれた仏画や曼荼羅、太鼓を鳴らしながら唱える読経などが、その特徴を表しています。曼荼羅は、世界(宇宙)の縮図です。修行僧たちは曼荼羅を目の前に見すえつつ、仏たちが作る世界を自分の心のなかに生み出すため修行に励みます。

◆ さまざまな仏たち

チベット仏教では非常に多様な仏の世界があり、数多くの仏が信仰されています。なかでも五仏(大日如来、阿しゅく如来、宝生如来、阿弥陀如来、不空成就如来)と呼ばれる「如来」グループが重要な存在とされています。 *如来：すでに悟りを得た仏。

このほかに、おどろおどろしい姿をして日本人にあまりなじみのない「ヘルカ」と呼ばれる仏もいます。ヘルカは体が青く、象皮をはおり、手に頭蓋骨杯や生首などを持つ恐ろしい姿をしています。元々はヒンドゥー教の神（尊格）です。ほかにも菩薩、女神、護法神と呼ばれる男神も存在します。また、仏ではないが、チベット仏教では「祖師(ラマ)」が非常に重視されます。祖師は宗派の創立者です。

日本の密教は、6 世紀中頃に中国経由で伝わり、平安時代初期に空海らによって本格的に広まりました。チベット仏教は、インドから直接伝わった密教の流れをくむため、上記に述べたようなインド仏教後期の伝統が色濃く残っています。

ネパール仏教寺院 一輪廻転生

仏教で生まれ変わりのことを輪廻転生といいます。人は生前の^{おこな}行い(業=カルマ、カルマン)によって死後も別の世界に生まれ変わり、これを永遠に繰り返すという思想です。輪廻転生は、バラモン教から仏教が引き継いでいるものです。同様にバラモン教から発展したヒンドゥー教にも輪廻思想が反映されています。

六道輪廻^{ろくどう りんね}（バヴァ・チャクラ）は、仏教の根本思想である輪廻転生^{こんぽん しそう}を表しています。



▲六道輪廻図は、本堂1Fの壁に描かれています。

六道輪廻図には、人間のもつ^{ほんのう}煩惱の3つの代表である「欲」と「怒り」と「愚かさ」の象徴として、^{にわとり}鶏・^{へび}蛇・^{ぶた}豚が描かれています。



「鶏」、「蛇」、「豚」はどこに描かれているのか、よ〜く見て探してみましょう！

六道輪廻の世界 — 無限に再生をくり返す

仏教では、すべての生ある物は死後もなんらかの形で存続するという普遍的信念があり、その一つの形態が輪廻転生です。生き物は死後、生前の行いに従ってしかるべき死後の世界に生まれ変わります。この輪廻する世界は、6つあるとされ、「六道」と呼ばれます。六道への生まれ変わりの連続を「六道輪廻」といいます。

- ・「地獄道」：殺生や盗みなどの罪を犯した者が堕ちる恐怖と苦しみの世界
- ・「餓鬼道」：飢えと渇きに悩まされ、栄養失調の餓鬼がいる世界
- ・「畜生道」：動物の住む世界
- ・「阿修羅道」：争いや戦闘が絶えず起きている世界
- ・「人道」：人間界のこと
- ・「天道」：天人が住む世界。「天道」は苦しみのない世界ですが、死後はまた他の世界に生まれ変わることにになります。

生前の行いにより生まれ変わる世界が決まり、善い行いをすればよい結果に、悪い行いは悪い結果につながるという「因果応報」とも関係します。

解脱 — どうすれば永遠の苦しみから逃れるのでしょうか

仏教は、「生きていることは、苦しみである」と考えます。そして、輪廻する世界にとどまることは、いつまでも煩惱の世界で苦しみ続けることを意味します。

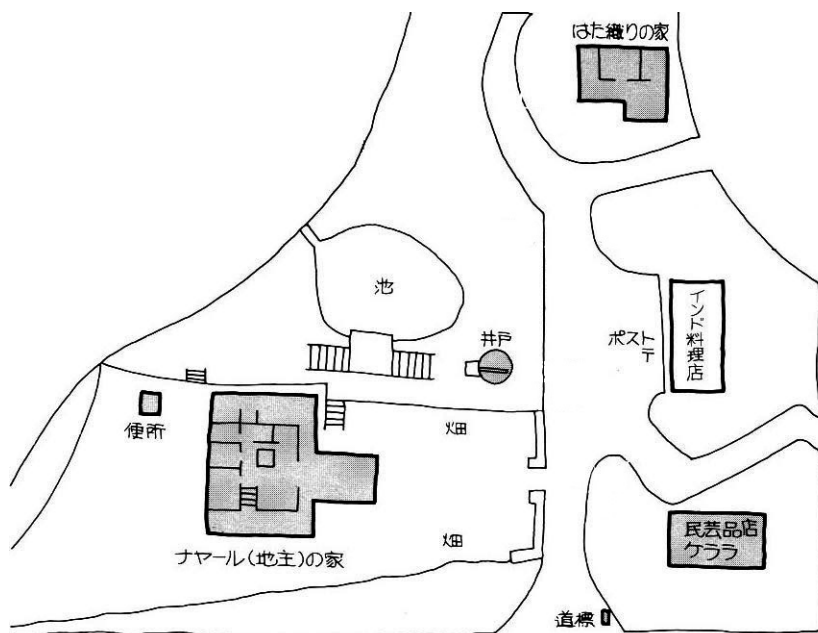
苦しみの原因は悩みや迷いなどの煩惱であり、煩惱をすべて滅すことができれば、輪廻から抜け出すことができます。仏教では、これを解脱といいます。煩惱の束縛から解放されて、永遠の安らぎの境地（涅槃）に至ることが、仏教の究極の目標です。ちなみに、煩惱から解脱し、安楽の境地にいたった存在がブッダです。



インド ケララ 州^{しゅう} の村

ここでは南インド、ケララ州のココヤシやバナナなど緑があふれる美しい水田村^{すいでん}をモデルに、上級階層^{かいそう}（カースト）の家を中心に復元^{ふくげん}しています。

熱帯^{ねったい}モンスーン気候^{きこう}のこの地の年平均気温は 27℃、もっとも気温が低い月でも 26℃もあります。また雨量は、年間 3700mm もあり、リトルワールドが復元している家屋の中で、もっとも雨の多い土地の家です。



【ナヤール（地主）^{じぬし}の家^{いえ}の壁^{かべ}】

この家の壁はラテライトと呼ばれる素材でできています。ラテライトとは、土の鉄分が酸化^{さんか}してできた熱帯^{あかつち}の赤土のことで、とても固いために建築材料として使われます。

民族衣装：サリーは1枚の布地

サリーは、インドやネパール、パキスタンなど南アジア地域の女性が着用する民族衣装です。実際、畑で働く女性や都会のOLなど、多くの女性が着ています。布の一端を肩にかけ、裾を地面すれすれにして歩く姿はとても優雅です。

サリーは長さ6m程度、幅 1.2mほどの一枚布。縫い合わせていないという点が大きな特徴で、素材は絹や木綿、化学繊維などです。もっとも高価なのは絹で、晴れ着や結婚式などの儀礼の衣装とされ、木綿製のサリーは値段が安く、普段着とされます。模様は、縞、チェック、唐草、花などさまざまです。刺繍、手描き、木版プリント、かすり、絞りなどの技法でつくられます。

サリーは体形に関係なく選びやすいため、しばしば贈答品に用いられ、^{ちょうぼう}「重宝」されます。そのため、女性は数十枚のサリーを持っていることが一般的なことです。

【サリーの着方】

① 布の端を右腰のペチコートにはさんで止め、前から後ろへ回す。

② 右手でプリーツを7回ほどとり、ペチコート前面にはさみこむ。

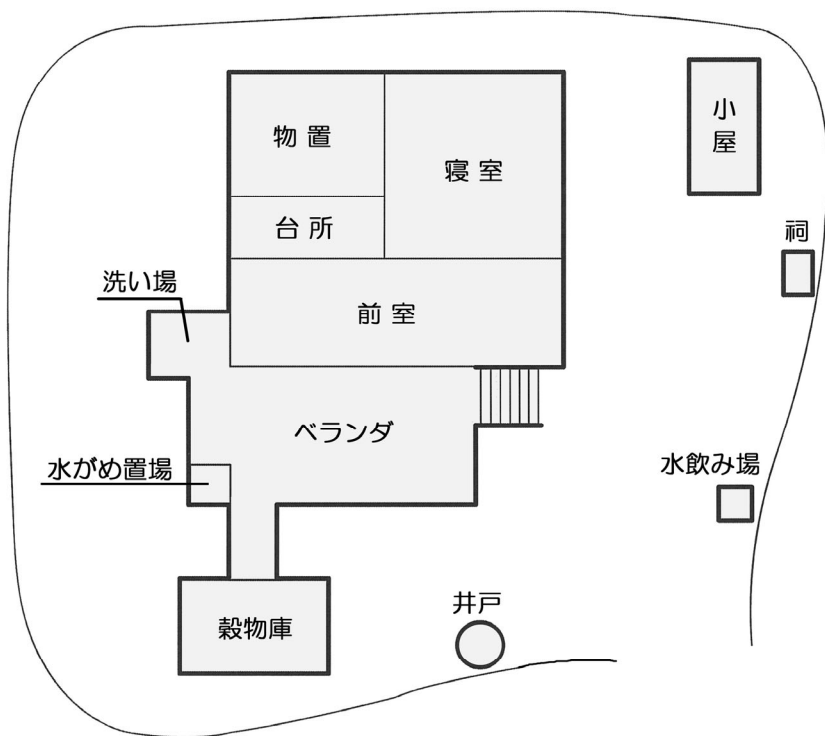
③ 残った布を再び後ろへ回し、胸から肩にかけて後ろへ垂らす。



サリーは、すそを垂らしてくるぶしを隠す点が重要で、逆におなかやおへそは露出させてもかまいません。

タイ ランナータイの家

タイ北部の平野^{ほくぶ へいや}にあるランナータイ^{ちほう}地方で、水稻耕作^{すいとうこうさく}をしている人びとの家です。高床^{たかゆか}の家屋^{かおく}には、食事や作業の場になるベランダと、寝室^{しんしつ}、かまどのある母屋^{おもや}と穀物庫^{こくもつこ}があります。床下^{ゆかした}は作業場、物置^{ものおき}、家畜小屋^{かちく}として利用されます。

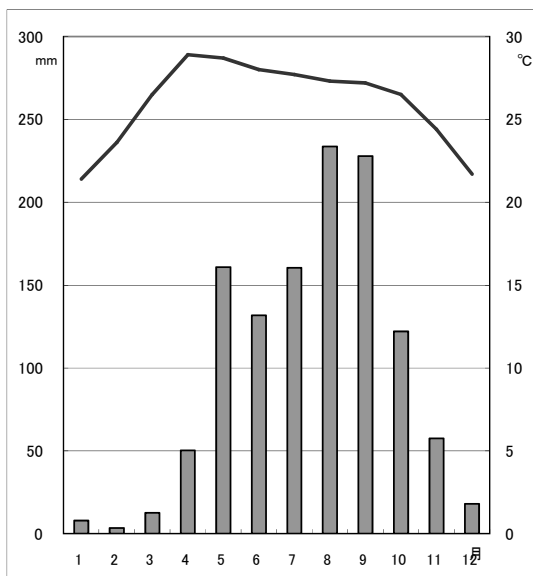


【ランナータイとは】

「ランナータイ」は13世紀^{せいき}の末から20世紀^{すえ}の初めまで、チェンマイ^{はじ}を中心にタイ北部の山間盆地^{さんかんぼんち}を支配^{しはい}していた王国の名前で、独自の文化や美術^{ぶつぎ}、言語などを持っていました。人口の多くはタイ・ユアン^よと呼ばれるタイ族系^{こけい}の人びとです。

きこう しつけ 気候と住まい：暑さと湿気をやりすごす

ランナータイ地方の気候は、季節風によって5月から11月にかけての雨期、11月から翌年の4月にかけての乾期にわかれています。右の降水量をあらわす棒グラフで、雨期と乾期の違いが、はっきりとわかります。年間平均気温は25.9℃もあり、年間を通じて20℃以上となっています。犬山の年間平均気温は15.8℃で、10℃も差があります。



ランナータイの月別平均気温と降水量

たかゆかしき 【高床式の家屋】

地面からの湿気が屋内に入りにくくするために、床を高くしています。また、床下を風が抜け、涼しくする工夫でもあります。さらに、雨期にはたくさんの雨が降り、一帯が水浸しになることもあります。屋内に水が入らないように、高床には洪水対策の役目もあるのです。

だいさく 【雨対策の屋根】

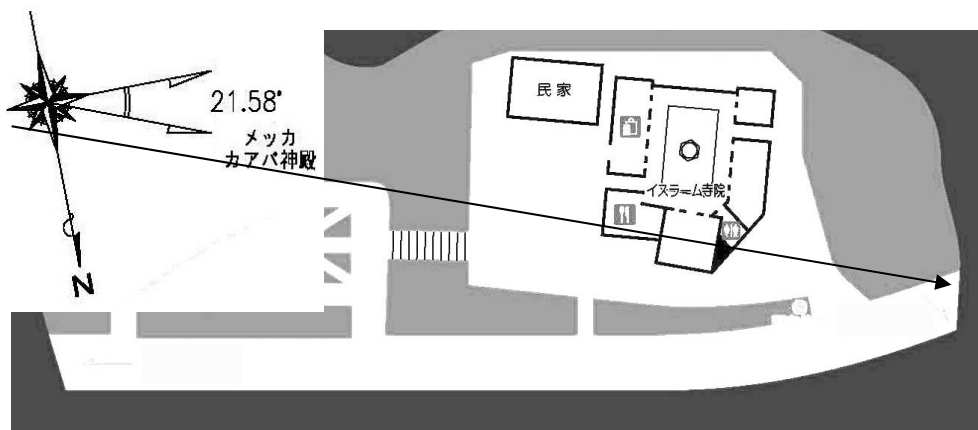
家屋の屋根は雨が多いため、水切れが良いように、薄い素焼きの瓦を葺き、傾斜を強くしています。

ざい かおく 【チーク材の家屋】

タイ北部はかつて良質なチーク材の産地でした。チーク材は硬く、耐久性に富むため湿度の高いこの地の家屋の材料としては最適なものでした。

「トルコ イスタンブールの街」^{まち}

古来より文明の十字路として栄えてきた世界有数の大都市、イスタンブール。1600 年もの間、いくつかの帝国の首都であった旧市街は、ユネスコの世界文化遺産にも指定されています。ここに復元したイスラーム学院(メドレセ)は、オスマン帝国時代に建設され、今も旧市街にたち活用されている建物をモデルとしています。



【微妙にずれた配置^{びみょう} 家屋^{はいち} キブラ Qibla】

周遊路^{そっこう}や側溝からみて、家屋が微妙にずれているのわかりますか？今回の建物の配置の軸は、キブラと呼ばれる方角です。イスラームを信じる人びと（ムスリム）は1日5回の礼拝を義務としています。その礼拝は聖地メッカのカアバ神殿（サウジアラビア）に向かってするものと決まっており、その方向を示すために、復元したメドレセの講義室にもミフラーブというくぼみを壁に設けてあります。このミフラーブのある壁を正確にメッカに正対させるため、厳密に計算して、家屋の配置を少しずらしました。リトルワールドの小さなこだわりです。

メフメット・アーってどんな人？

展示家屋のイスラーム学院（メドレセ）を建てた人、メフメット・アーはオスマン帝国のトプカプ宮殿で、ハーレムを司る責任者でした。ハーレムはスルタン（王、皇帝）のプライベート空間であり、スルタンの妃たちや子どもたちが暮らす場所でもありました。御所でいえば「後宮」、江戸城でいえば「大奥」のようなところです。

この役職の正式名称はダリュッサーデ・アースですが、親しみを込めてクズラルアースと呼ばれました。クズは「乙女」という意味で、ハーレムに暮らす女性たちをとりまとめる役目からついたそうです。

次の王となる皇太子やその母と常に接し、親身に世話をし、信頼を得なければ務まらない役目です。もちろん、スルタンとも日頃から接する立場ですので、自然と発言権が増し、宮殿の中では、スルタン、大宰相に次ぐ高い地位にありました。

クズラルアースになるためには、いくつかの条件がありました。帝国の中枢を担う人材ですので、頭脳明晰であることは当然です。ハーレムを守るという重要な役目のためには、さらに清廉潔白、品行方正でなければなりません。スルタンの妃たちとの清い関係をはっきりさせるために、ハーレムに務める男たちはみな去勢をした者、宦官でした。

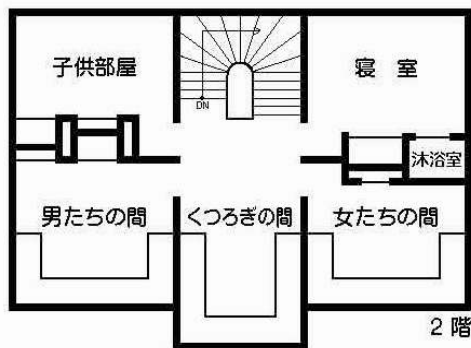
ムスリムは去勢を禁止されているので、異教徒・異民族の少年を去勢して宦官とすることが常でした。メフメット・アーもトルコ人ではありませんでした。彼はアビシニア、今のエチオピア出身の黒人でした。奴隷とされ、去勢され、エジプト経由でイスタンブールに連れてこられる途中で、イスラームに改宗し、頭角をあらわし、出世したのです。

妻もないメフメット・アーは、宮廷生活で得た財を寄進し、メドレセやモスクやハمامといった、人びとの役に立つ施設をつくったのです。このモデルとしたメドレセ以外の建物もイスタンブールには残っており、人びとの集う場所として活用されています。

「トルコ イスタンブールの街」

こらい じゅうじろ さか
 古来より文明の十字路として栄えてきた世界有数の大都市、
 イスタンブール。1600 年もの間、いくつかの^{ていこく}帝国の^{しゅふ}首都で
 あった^{きゅうしがい}旧市街は、ユネスコの^{せかいぶんかいさん}世界文化遺産にも指定されてい
 ます。ここに^{ふくげん}復元した伝統的民家は今も旧市街にたち活用さ
 れている建物をモデルとしています。

展示家屋「イスタンブールの民家」



【家族をつなぐソファとセディル】

くると階段を上った
 2 階が生活空間です。あがり
 きたところはソファと呼ば
 れ、2 階の各部屋を^{れんけつ}連結する
^{やくめ}役目をにう重要な空間です。

ソファに連続して、エイバン
 というくつろぎの間、もてなし
 の場があります。マットレスを
 し^つ敷き詰めた作りつけのベンチ
 は、セディルといいます。

セディルは、トルコの伝統的
 民家には^か欠かせないものです。



民家建築情報

木造3階建て住居（3階部分は屋根裏としており、展示はありません）
 建築面積 76.06 m²（約 23 坪） 延べ面積 146.82 m²（約 44.5 坪）


かつての高級住宅街の家

復元ふくげんのモデルとした民家は、19 世紀末にスレイマニエ・モスクのそばに建てられたものです。残念ながら、誰が建てた家かは判りません。しかし、近隣にはオスマン帝国ていこくの地方の県知事けんちじがイスタンブールで宿泊しゅくはくし、客人きやくじんをもてなすための建物があり、その建築年代も同時期なので、19 世紀末当時は高級官僚かんりようなど富裕層ふゆうそうが暮らす住宅街であったと考えられます。

イスタンブールは、7つの丘の上にたつ街といわれていますが、そのひとつがスレイマニエ・モスクのある丘です。見晴らしも良く、風通しも良い丘の上の潇洒しょうしゃな家屋。この家の持ち主も、それなりの地位の人、そしてそれなりのお金持ちであったと想像されます。

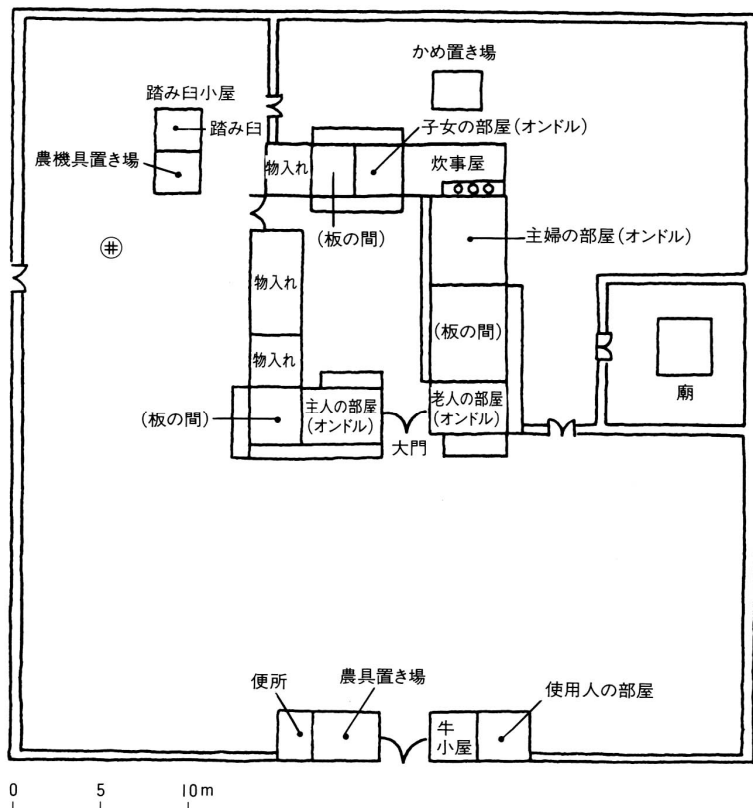
ナザール・ボンジュウ Nazar Boncuğu

民家の玄関げんかんの上には、目玉めだまをかたどった青いガラス玉がかかっています。トルコ語でナザール・ボンジュウというお守りです。ナザールが「目」、ボンジュウが「ガラス玉」を意味し、この家の人たちへの「ねたみ」、「そねみ」、「うらみ」といった悪意あくいをもった視線しせんを避ける、除けるためのものです。この悪意をもった視線しせんを邪視じゃしとよびますが、意識して投げる邪視だけでなく、無意識に投げかける邪視もあり、容易さに避けることはできません。そうした邪視を避けるために、トルコの人びとは質素しっそな生活を心がけているのですが、どこからこうした悪意を受けるかわからないために、青い目玉のお守りを家の壁に掛ける習慣をもつのです。

 トルコのお土産店みやげてん「ラーレ」には、いろいろな形のナザール・ボンジュウがあります。ぜひ、ご自分のために、あるいはおみやげに、お求めください。

韓国 地主の家

韓国のほぼ中央部、慶尚北道の山村で、かつての地主（両班）が1937年に建てた家に移築、復元しました。口の字形の母屋には、主人の部屋と主婦の部屋が棟を分けてあります。これは、「男女七歳にして席同じからず」という儒教の教えに基づくものです。



くらべてみよう～見学のポイント

地主の家と農家は、慶尚北道の同じ村に建っていたものです。家のつくり、材料、広さなどからさまざまな違いを見ることができます。2つの家をくらべて、どこが違うのか・どうして違いがでるのかを考えてみましょう。

かいてき

きょしつ

快適に住まう：季節に合わせた居室

部屋の床には、^{どま}土間、オンドル床、板床の 3 種類があり、土間は物置に、オンドル床と板床は居室に使います。オンドル床の間は、熱を逃がさぬように寒さ対策をこらした冬の部屋で、板床の間は少しでも風が入るように暑さ対策をほどこした夏用の部屋です。

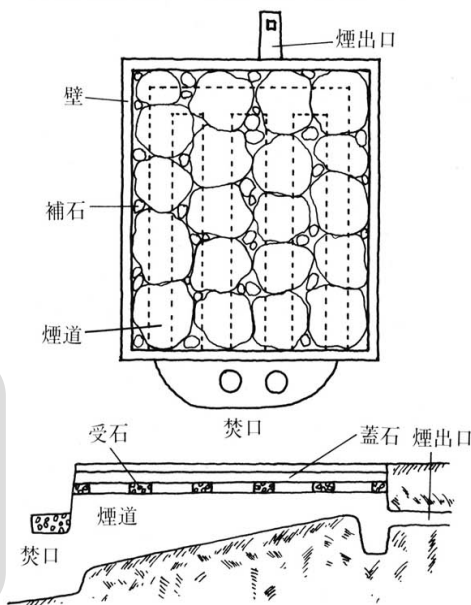
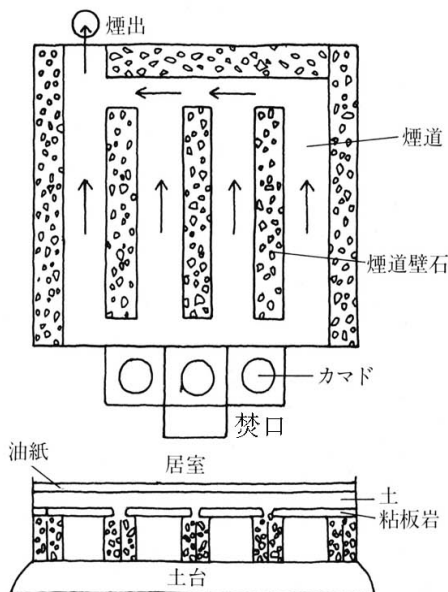
オンドル ^{ゆか だんぼう} ー冬用の床暖房

オンドルとは^{ゆか だんぼう}床暖房のことです。床下に石を並べて数本の^{みぞ}溝をつくり、この溝の天井に平らな石を置き、^{けむり}煙の通り道とします。天井の石の上に粘土を^{たた}叩いて平らにし、その上に紙を^は貼り、さらに油のついたオンドル紙を貼ります。

溝を通った煙が石と粘土と紙を通して床に熱を伝えます。煙を発生させる^{たきぐち}焚口と、トンネルを通った煙が出ていく^{えんとつ}煙突の間の^{こうばい}勾配のつけ方が難しく、それにより床の暖かさが違ってきます。

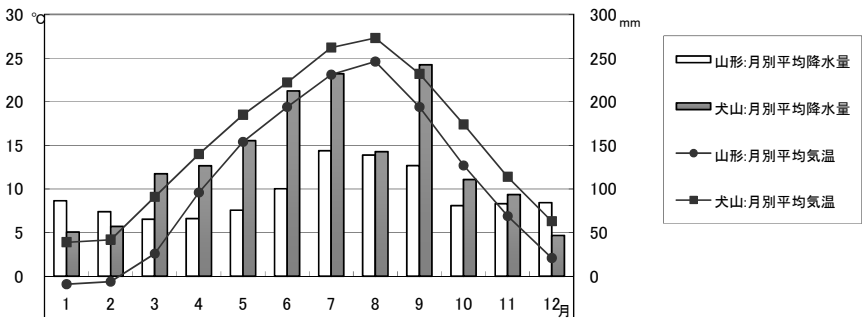
オンドル床の間と板の間では、床のほかにもそれぞれの季節に合わせた工夫がほどこされています。どんな工夫があるかがしてみましょ。

ヒント：天井/かべ/とびら



がっさんさんろく
山形県 月山山麓の家

豪雪地帯の出羽山地、月山の麓、月山沢に、1767 年に建てられた中門づくりの養蚕農家を移築しました。月山沢は 1976 年にダム建設のため廃村となり、水没しました。



きこう 気候と住まい：雪とともに暮らす冬

おもてめん 表面のグラフをみると、12月～2月にかけて、山形月山山麓の方ががっさんさんろうく 多くなっていますが、その多くは雪です。冬のあいだ、3～4mもの雪が月山山麓では積もります。

ちゅうもん 中門づくり

曲がり屋の一種で、日本海側の豪雪地帯に特徴的な建築様式です。土間の手前におおと がある大戸が家の入口で、中門は雪を払ったり、農具などの物置きとして使われ、屋内の暖気を逃がさない工夫です。冬の間は、中門の外に“雪ローカ”と呼ぶとっしゅつぷ 突出部を設けます。

ゆきがに 雪囲い

深雪地帯では、冬になるとカヤやムシロで家を囲みます。これを雪囲いといいます。これは寒さ対策であるとともに、雪が家にくっついて押しつぶさないようにという工夫です。

しょうじ 明かりとりの障子窓

雪囲いはしょうじ 障子の上の鴨居あたりまでおおうため、家の内部は薄暗くなってしまう。そのため、軒をできるだけ高くあげ、その壁に窓を設けて、さいにうぐち 採光口とします。

いたかべ 板壁

つちかべ 土壁は雪に弱く、崩れてしまうので、板壁とします。

【重さ対策】

雪の重みに耐えるように、太くてがっしりした木材を柱や梁に使用します。

【雪おろし】

“雪ぼり”といい、ひと冬に6、7回は屋根に登って、雪を融雪池に落とし、水を流して溶かします。

みちら 道踏み

冬、子どもたちは朝起きると、カンジキをつけて、まず道踏みをします。毎日のように、一日に何回もします。

